

四国横断自動車道建設にともなう 埋蔵文化財発掘調査実績報告

昭和 61 年度

1987年3月

**日本道路公団
香川県教育委員会**

昭和 年 月 日

関 係 者 各 位

香川県教育委員会

教育長 林田 英樹

埋蔵文化財発掘調査報告書の贈呈について

文化財の保護につきましては、平素格別のご配慮とご指導をいただき、厚くお礼申しあげます。

さて、このたび当教育委員会では下記の報告書を刊行しましたので、贈呈いたします。なお、お手数ですが折返し受領書をお送り下さい。

記

書 手 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告」 部

送り先 〒760-高松市番町4丁目10号 香川県教育委員会 文化行政課
JR 坂出市本町1丁目1番24号 坂出連絡事務所

キ リ ト リ 線

受 領 書

「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告」 部

上記の報告書を受領いたしました。

昭和 年 月 日

住 所

氏 名

印

例　　言

- 本書は、四国横断自動車道建設工事に伴い昭和61年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の実績報告である。
- 調査は日本道路公団高松建設局の委託をうけ、香川県教育委員会事務局文化行政課が実施した。

調査組織は下記の通りである。

総括課長	廣瀬和孝
主幹	松本豊胤
課長補佐	片山亮
庶務係長	宮谷昌之
主任主事	前田和也
善通寺連絡事務所総括	所長　入江久(嘱託) 主任文化財専門員　伊沢肇一

調査担当	
永井遺跡	文化財専門員　渡部明夫 主任技師　安藤清和 〃　鷹田耕作 〃　三好彩三 嘱託　植田広 山元敏裕(～11.30)
西碑殿遺跡(集落)	主任技師　鷹田耕作 〃　三好彩三
西碑殿遺跡(経塚)	文化財専門員　渡部明夫 主任技師　野中寛文 嘱託　山元敏裕(～11.30)
利生寺古墳	主任技師　野中寛文 嘱託　株木彰(～3.31)
矢ノ岡遺跡	主任技師　野中寛文 嘱託　株木彰(～3.31)

福岡神社跡	主任文化財専門員	伊沢肇一
延命遺跡	主任文化財専門員	伊沢肇一
(八反地地区2次調査)		
一の谷遺跡群	文化財専門員	岸上康久
	文化財専門員	西岡達哉
	技術師	岡田 静明
	"	北山健一郎(～12.31)
嘱託	清水周作(9.1～12.31)	
	"	田淵裕司
	"	馬渕元行(～5.31)
長砂古遺跡	主任技師	小西正行
	技師	磯崎 寛
	嘱託	松浦 隆
作田八丁遺跡	主任技師	小西正行
	"	中西昇(～7.31)
	技師	片桐孝浩
	"	磯崎 寛
	嘱託	松浦 隆
	"	竹内峰雄(～12.31)

整理担当

利生寺遺跡
大門遺跡
利生寺古墳

主任技師 野中寛文

乾遺跡
上一坊遺跡
矢ノ塚遺跡

主任技師 萩田耕作

中村遺跡 主任技師 真鍋昌宏

3. 昭和60年度事業の利生寺古墳・矢ノ塚遺跡は、前年度実績報告に未掲載のため、本年度実績

報告で取り扱う。

4. 本書は、各調査担当者が執筆し、片桐・磯崎・松浦が編集した。

目 次

I	昭和61年度発掘調査事業概要	1
II	各遺跡の調査	4
	永井遺跡	4
	西碑殿遺跡	18
	利生寺古墳	32
	矢ノ岡遺跡	34
	福岡神社跡	36
	延命遺跡(八反地地区・2次調査)	38
	一の谷遺跡群	40
	長砂古遺跡	60
	作田八丁遺跡	68



I 昭和61年度調査報告

四国横断自動車道（善通寺～豊浜）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、いよいよ最終年度を迎えた。

今年度は、日本道路公団高松建設局との間で昭和61年4月1日付で締結した「昭和61年度・委託契約書」によって、着手した。

事業内容は、発掘調査54,600m²と、出土品の整理・報告書刊行との2本立になっている。

発掘調査事業の部は、ほぼ予定通り進行したが、作田八丁遺跡（中姫遺跡）において一部未解決の用地があり、結局480m²残し54,120m²の発掘調査を終了した。（99.8%完了）

出土品の整理・報告書刊行については、当初10遺跡の報告書刊行を予定していたが、発掘現場作業の期間短縮が急務となり、整理・報告書作成担当職員の配置転換をせざるを得なくなり7遺跡の報告書を刊行するにとどまった。

今年度の調査は、善通寺地区2箇所、三豊地区2箇所、観音寺地区3箇所で実施した。

善通寺地区的永井遺跡は、60年度からの縦続調査で、縄文時代後期・晩期の自然河川を中心とした遺構を検出した。表土層より3mも地下にある自然河川より縄文土器（彦崎KI～黒土BI）をはじめ、編み物やドングリやトチノミ、クリ等の植物遺体を大量に採集した。まさに、堅果類の処理場の様相を呈していた。

「県内の縄文遺跡は海浜部」という前提を大きく塗り変えたことは注目される。さらに縄文後期から晩期の縄文土器編年の資料集成がされた点は大きな成果であると共に、沖積平野の発掘調査方法が今後大きく変化する契機にもなった。

善通寺地区的最西端に位置する西碑殿遺跡は、60・61年度に発掘を行ったが、一部用地未解決のため一時中断を余儀なくされていた。弥生・奈良時代、中世の建物跡をそれぞれ数棟ずつ検出。また墓地移転中に一字一石の経塚が発見された。所有者とも協議を重ねながら調査を行った。

豊中インター脇に所在する福岡神社遷宮に伴う調査も行った。当該地は財田古墳群の中にあって、古墳上に祠が祀られているとの伝承があった。予備調査の結果、略北西-南東に支走すと溝1本を検出し、そこより弥生土器片少々採集したにとどまった。

延命遺跡八反地地区は、59年度に発掘調査を実施したが、建物等の未解決物件があり、一旦調査を中止していたところである。建物移転に伴い予備調査、本調査を行った。弥生時代末～古墳時代初頭、古代末～中世、近世の集落跡を確認した。

財田川の左岸に広がる三豊平野に一の谷遺跡群がある。刈田郡条里として発掘調査を始めたが、弥生時代後期の竪穴式住居跡32棟、前期2棟を検出した一大集落地の様相を呈している。

母神山古墳群より北西に派生した丘陵先端部近くに長砂古遺跡があり、60年度に引き続き調査

した。当所で、6世紀後半の横穴式石室を一基検出した。石室の床面は、母神山古墳群に特徴的な石を敷き詰めて構築している。

作田川の左岸に開けた作田八丁遺跡（中姫遺跡）では、掘立柱建物、竪穴式住居等都合13棟を確認した。しかし粘土採取により相当な遺構が損壊を受けていたのは残念であった。土井之池の櫛門工事が急がれていたが、用地未解決部分があり当初の調査工程を変更しての調査となった。61年1月6日に一部用地解決のあった部分は1月27日には調査が完了し公団へ引き渡した。

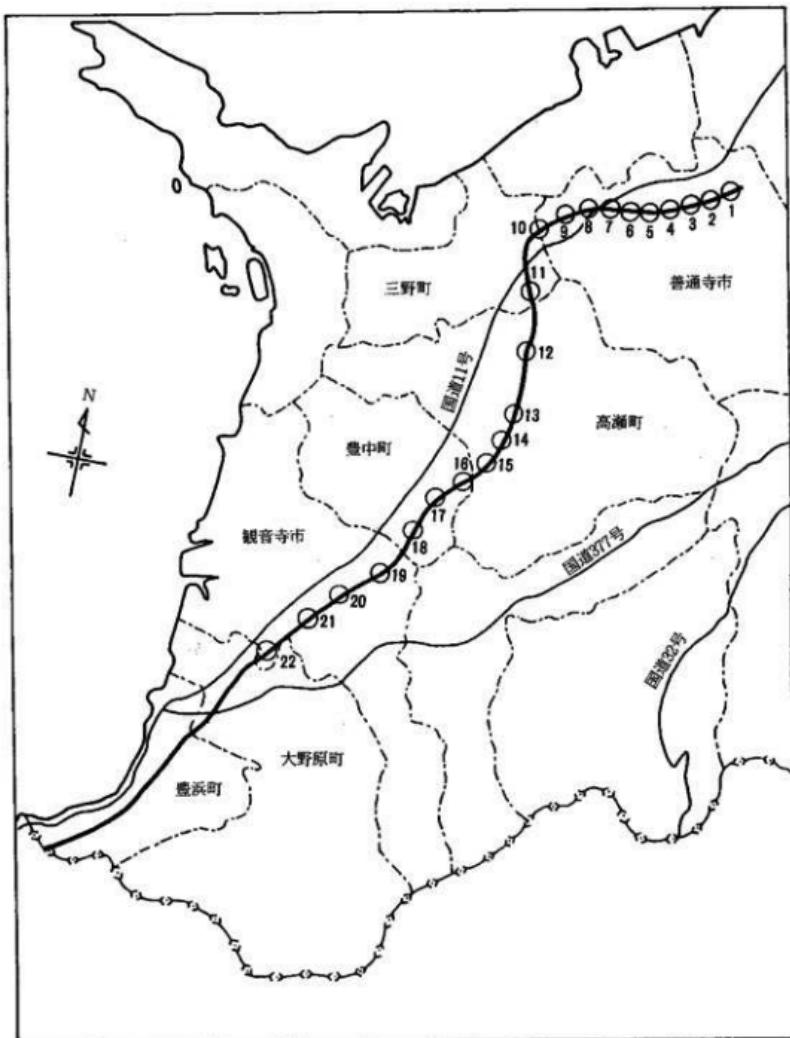
調査体制は、職員23名（技師15、庶務1、嘱託7）、調査補助員3名、整理作業員20名、現場作業員230名と、過去、最も多い人員で発掘調査、整理作業・報告書刊行の業務を遂行した。

61年12月末には発掘調査が終了（用地未解決部分除く）した。出土遺物は、コンテナ（28個入）4,570箱にのぼり、公団用地内を借用して、62年1月1日付で善通寺連絡事務所分室を開設。出土品等の収蔵を図っている。

発掘調査区の隣接地でC-BOX、側溝工事が急ピッチで進行している。工事用道路を何回とななく付替ながら、公団・企業体と綿密な協議を重ねながら、4ヶ年の発掘調査は終了した。

番号	遺跡名	対象面積(m ²)	所在地	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	発掘調査期間
1	金蔵寺下所遺跡	17,000	善通寺市金蔵寺町下所	1,300	8,000	7,700			58.4.1~60.2.28
2	稻木遺跡 C	4,000	善通寺市稻木町・下吉田町		600	3,400			59.4.1~60.3.31
2	稻木遺跡 B	17,100	"			5,100	12,000		59.9.17~60.2.28
3	稻木遺跡 A	300	"			300			58.6.29~59.2.14
4	永井遺跡	33,300	善通寺市下吉田町・中村町				15,600	17,700	60.5.7~61.12.23
5	中村遺跡	9,000	善通寺市中村町瀬岡				9,000		59.7.3~59.9.17
6	乾遺跡	2,100	善通寺市中村町乾			200	2,100		60.9.2~60.11.20
7	七坊遺跡	2,800	善通寺市吉原町七坊			400	2,200		60.11.13~61.1.24
8	矢ノ塚遺跡	11,800	善通寺市矢ノ塚			4,800	7,000		58.10.8~60.8.30
9	西碑殿遺跡	5,200	善通寺市碑殿町三反畠			3,000	1,400	800	60.2.4~60.4.30(1次) 61.7.28~61.8.11(2次)
10	深尾石棺群	500	三野町大見深尾			500			59.9.11~59.10.23
11	道免窓跡	100	二野町道免丸尾			100			59.9.11~59.10.23
12	北条遺跡	100	高瀬町上高瀬北条			100			60.5.9
13	利牛寺遺跡	3,200	高瀬町上勝間砂古			3,200			60.5.22~60.7.18
14	大門遺跡	5,500	"			5,500			60.7.22~61.1.28
15	利生寺古墳	700	"			700			60.12.2~61.3.17
15	矢ノ岡遺跡	2,600	高瀬町上勝間矢ノ岡			2,600			61.1.28~61.2.27
16	西ツモ古墳	1,000	豊中町笠田笠岡		200	800			59.4.16~59.5.14
17	財田占墳	1,000	豊中町上高野			1,000			58.9.26~58.11.30
18	城ノ岡地区	5,000	豊中町上高野城ノ岡			4,000	1,000		58.11.28~59.7.18
18	八反地地区	13,000	豊中町上高野八反地			10,000	2,000	1,000	59.7.19~60.5.15(1次) 61.9.1~61.9.30(2次)
19	一の谷遺跡群	36,100	観音寺市本大町・吉川町			2,500	17,600	16,000	60.5.15~61.12.25
20	石田遺跡	17,200	観音寺市池ノ尻町石田			1,200	16,000		60.5.1~60.1.11
21	長砂古墳	8,900	観音寺市池ノ尻町大長			1,200	2,500	5,200	61.1.13~61.9.9
22	作田八丁遺跡	14,000	観音寺市作田町八丁			100		13,420	61.4.3~61.11.28 62.1.7~62.1.27
合計		211,500		1,300	19,200	57,900	78,500	54,120	残り 480m ²
進捗率 %				0.6	9.7	37.1	74.2	99.8	

調査一覧表



発掘調査位置図

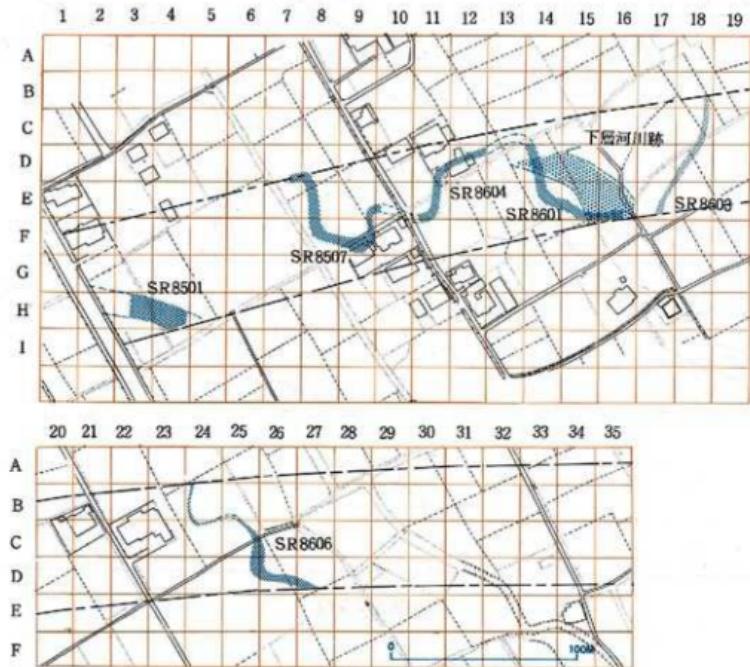
II 各遺跡の調査

永井遺跡

1. はじめに

永井遺跡は、丸亀平野西部の善通寺市中村町島田・榎田及びこれに隣接する下吉田町下所西に所在する。四国横断自動車道の路線にかかる遺跡面積は、33,300 m²で、西は県道多度津善通寺線から、東は市道石川永井線までの東西約700 mの範囲である。

発掘調査は昭和60年5月7日に開始し、61年12月24日に終了した。その結果、縄文時代後期中頃（彦崎K I式）の自然河川跡から、ドングリなどの多量の堅果類と共にヒョウタン・編み物・石皿・磨石・鳥形木製品などがまとまって出土し、香川県の縄文時代を考えるうえできわめて重要な遺跡であることが確認された。



第1図 横断道とグリッド配置図

2. 遺構について

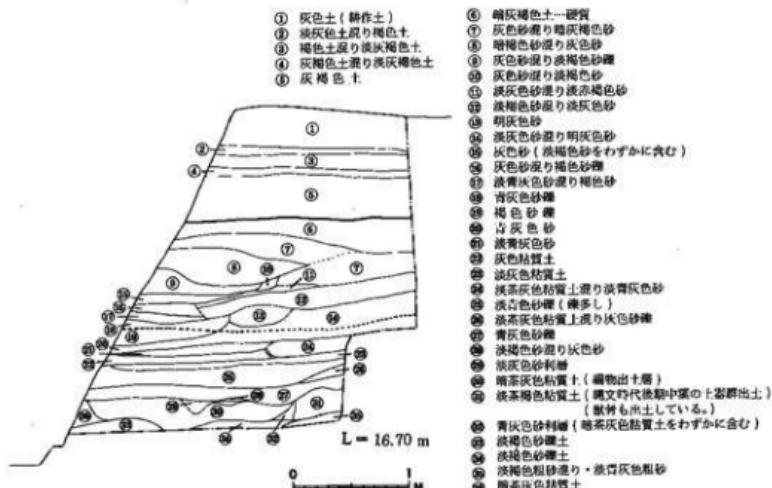
今年度の調査対象地は、市道吉田道線の西150mから東200m付近の東西約350m(V~XII区)、面積にして17,600m²である。

検出した遺構は、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、それに自然河川跡である。これらの多くは、地表下20cm(耕作土直下)~40cmで検出された。検出した主な遺構には、縄文時代後期の自然河川跡(V~VII区、X区)、弥生時代と考えられる掘立柱建物跡、その他のものとして、近現代の土坑、溝状遺構、ピットなどがあるほか、縄文時代後期の包含層も確認できた。

A 自然河川跡

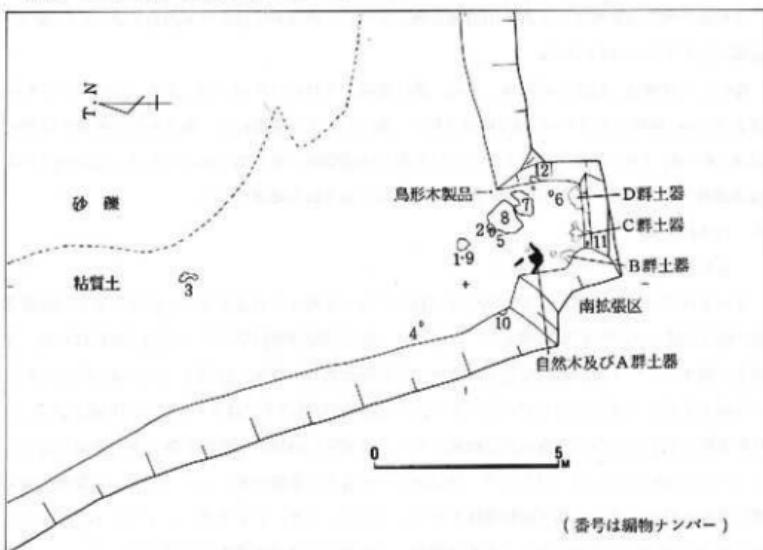
SR 8601・SR 8604(仮称)

V~VI区で、昨年検出したSR 8507(仮称)に続くと考えられる幅4m、深さ1.2mの規模を持つ蛇行の激しい自然河川跡を検出し、これらが一連の自然河川跡であることが明らかになった。土層を大別すると、I層、暗灰褐色土、II層、灰褐色砂質土、III層、砂層であり、最下層のIII層から縄文土器を多量に出土している。また、この自然河川跡の下にはさらに古い河川跡があり、これに堆積した青灰色砂層、青灰色砂礫層からも、縄文時代後期の土器を主体とする遺物を出土した。この下層河川跡は、D-14からF-16にかけて粘質土の堆積が著しく、この層より多量の縄文時代後期彦崎K I式の土器・植物遺体(トチ、クルミ、クリ、ドングリ、ヒョウタン、センダン等)・編み物13点・石皿・磨石・鳥形木製品・木製梳など貴重な資料が出土している。



第2図 F-16 南塗張区 東壁断面図

また、このすぐ東でも縄文時代後期の自然河川跡 SR 8603を検出している。



第3図 V区 編み物出土平面図

SR 8606 (仮称)

X, XI区で、幅3~10m、深さ0.4~1.5mの規模をもつ、蛇行のしい自然河川跡を検出した。調査区内で、総延長約100mを発掘した。土層を大別すると、I層、黒色粘質土、II層、灰褐色砂質土、III層、暗茶褐色砂、IV層、暗茶褐色砂礫であり、最下層のIV層から縄文時代後期の土器を出土した。

この地域は、田畠の整備のため1m~1.5mの地下げを受け、周囲にも土取りの採土坑が多數あり。その中から、このSR 8606内にあったと考えられる縄文時代後期の土器



写真1 SR 8606 全景

が多量に出土している。

掘立柱建物跡

X区で、重複した掘立柱建物跡を3棟検出した。柱穴の形態は、すべて円形を呈しているが主軸方向・規模は一致しない。SB8601は1間×3間(120cm×720cm), SB8602は1間×2間(220cm×320cm), SB8603は1間×1間(200cm×270cm)の規模をもつ。出土遺物としては、それぞれ土器片が数点だけである。各々の柱穴は弥生時代前期と思われる溝状遺構SD8691に切られているが、埋土の類似からほぼ同時期と考えられる。

3. 下層河川跡の

遺物出土状態

F-16からD-14

に向って北西に流れ
る下層河川跡の粘質
土から多量の植物遺
体や土器・石器・獸
骨・土偶等が出土し
た。F-16付近では、
彦崎K1式の土器群
があり、その北側を
中心に霞の類を用い
た13点の編み物や石
皿・磨石を出土した
ほか、ドングリ・ト
チ・クリ・クルミ・
ムクロジ・センダン
・イヌガヤ・ムク・
クス・ヒヨウタンが
出土した。これらの
中ではドングリが最
も多く、しかも破損
していない実も多か
った。クリ・トチは
果皮の破片である。

編み物No.1の東側で

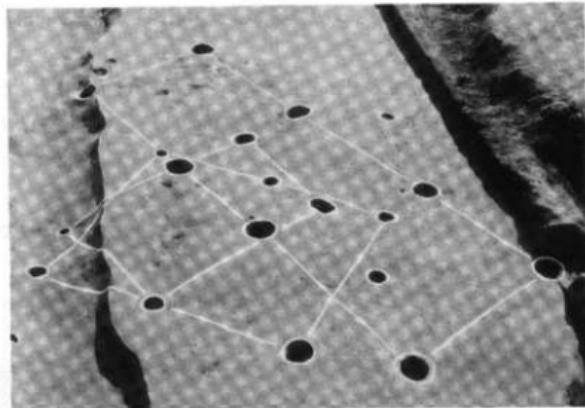


写真2 X区 掘立柱建物跡

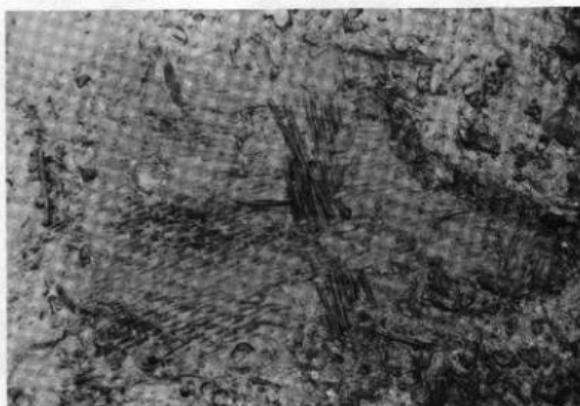


写真3 F-16 編み物 出土状態

はこれらの堅果類が集中して出土し、編み物No.12は堅果類に包み込まれるように出土した点が注目される。D-14では編み物は出土せず、堅果類も特に多くはなかったが、完形のヒョウタンが出土した。

また、F-16では堅果類と共に鳥形木製品が出土したほか、F-16からD-14にかけてこれに類似した木製品や、大型容器・碗・きぬた状木器・板状加工木・有孔加工木・杭状加工木・割材等が出土した。下層河川跡は、県内で初めての縄文時代低湿地遺跡の発掘であったが、F-16付近で大量の堅果類と共に、土器・編み物・石皿・磨石などの植物性食糧とその選別・保存・調理用具がまとまって出土し、しかも鳥形木製品や土偶などの祭祀品が伴出したことが注目される。

4. 遺物について

61年度の調査では、縄文時代から江戸時代に及ぶ多様な遺物が出土している。この中でも特に注目されるのは、E-14からF-16にかけてSR8601の下層で検出された下層河川跡の粘質土（以下暗茶灰色粘質土と総称する）中から出土した縄文土器・石器・編み物・鳥形木製品及び堅果類を含む植物質遺体である。

しかしこれらの大半は未整理のため、ここではF-16南拡張区とその周辺から出土した縄文土器の一部を紹介する。

南拡張区の暗茶灰色粘質土中から出土した土器群は、A～Dの4群に分かれて出土したので、



写真4 V区 F-16 南拡張区 土器群 出土状況

それに従って説明する。

第4図(1~6)はA群土器(1~3)とB群土器(4~6)である。浅鉢(1・6), 深鉢(2~5)がある。1は口縁がわずかに肥厚し内彎する。2は屈曲して内傾する口縁部をもつ。3は体部が直線的に外反する底部である。4は肥厚する口縁部外面に沈線で区画した文様をもつ。5は口縁が肥厚しやや外反する。6は口縁部にRLの繩文帯を押捺し、その上から沈線で区画した文様をもつ彦崎K I式土器である。

第5図(7~10)は、B群土器の浅鉢である。7は口唇部にRLの繩文帯を持ち頸部下方から底部にかけてもRLの繩文をもつ彦崎K I式土器である。8は口縁が肥厚し内彎する面部端部に沈線文を持つ。9・10は内傾する頸部をもつ無文の浅鉢で、9の口縁端部は面取りしている。

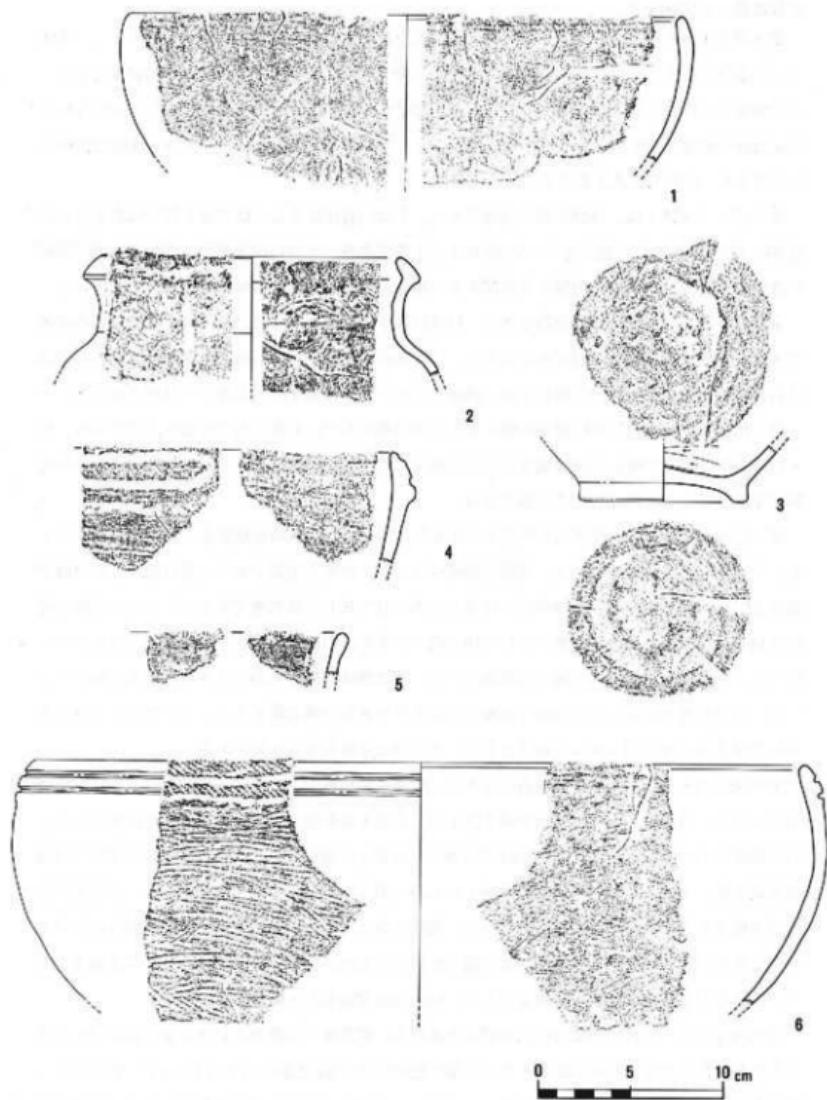
第6図(11~14)は、C群土器である。11は口縁から底部にかけて貝殻条痕をもつ粗製の深鉢である。12は口縁がやや内傾ぎみに立上り、口唇部に刻目文をもつ彦崎K I式の浅鉢である。13は肩部に連続刻目文をもつ彦崎K I式の浅鉢である。14は粗製深鉢の胴部片で貝殻条痕をもつ。

第7図(15~17)の15は口縁が内彎しRLの繩文帯をもつ。C群土器で彦崎K I式である。16・17はD群土器で内彎した口縁端部にRLの繩文帯をもつ。17は繩文帯の上から渦巻文や斜行沈線文を施す。ともに彦崎K I式土器である。

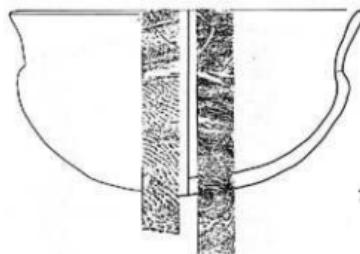
第8図(18~23)は、南拡張区周辺から出土したもので、暗茶灰色粘質土(19・20・22・23)と、その下の青灰色砂礫(18)、淡褐色砂礫(21)からの出土土器である。18は肥厚した口縁が波状をなし、上面に同心円及び平行の沈線で区画されたRLの磨消繩文をもつ。さらに頸部外面には格子目状の細い沈線文を施す。19は18と似ているが、口縁部に円孔をもち、繩文は施されていない。18・19は津雲A式に属する深鉢である。20は浅鉢で体部外面には平行沈線文を垂下している。21は口縁が肥厚しその内面に沈線で区画されたRLの繩文帯をもつ。22・23はやや外反ぎみに肥厚する口縁内側に平行沈線文をもつ。20~23は彦崎K I式土器である。

第9図(24~28)も南拡張区周辺の土器で、暗茶灰色粘質土(24・25)やその直上の暗灰色砂(26・27)、粘質土の下の青灰色砂礫(28)からの出土品を図示している。すべて浅鉢である。24は頸部がやや外反し、肥厚した口縁部の外面にはRLの繩文をもつ。25は胴部に交錯する沈線を横走させ、RL・LRの磨消繩文を施したものである。26は胴部が内彎し、外面には鋸歯状の斜行沈線文をもつ。27は口縁が肥厚外反し、端部外面にRLの繩文をもつ。さらに胴部にもRLの繩文をもつ。28は外反した頸部によく張った肩部をもつ。肩部と頸部の境にはS字沈線文をもち、その左右にV字状の斜行沈線文をもつ。24~28は彦崎K I式に属する。

以上のように、これらの繩文時代後期の土器群を、中部瀬戸内地方における編年案に対応させると後期中葉の津雲A式・彦崎K I式の特徴に類似していることから、D-14からF-16にかけて検出された下層河川跡の暗茶灰色粘質土及びその上下層から出土した土器群は、上記土器型式の併行期と考えられる。



第4図 F-16 南拡張区出土 A・B群土器



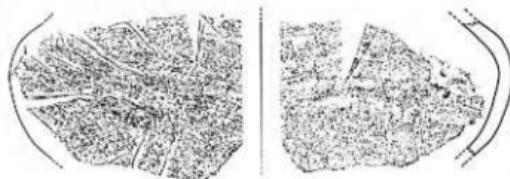
7



8



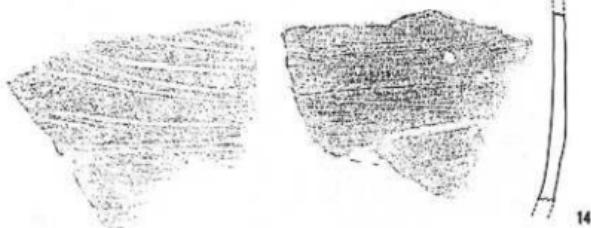
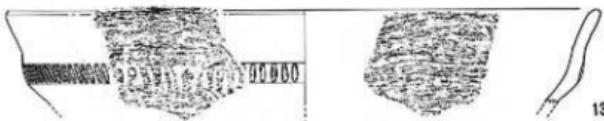
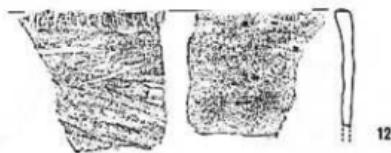
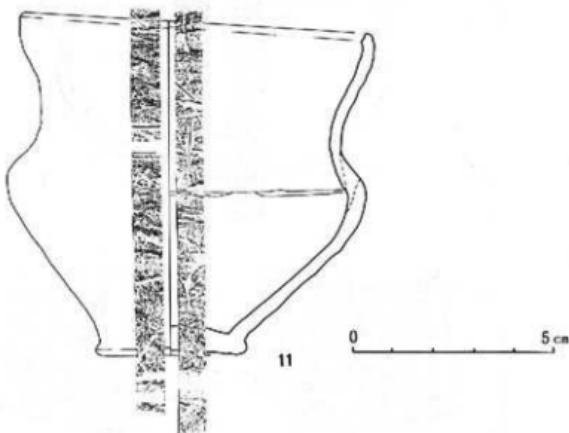
9



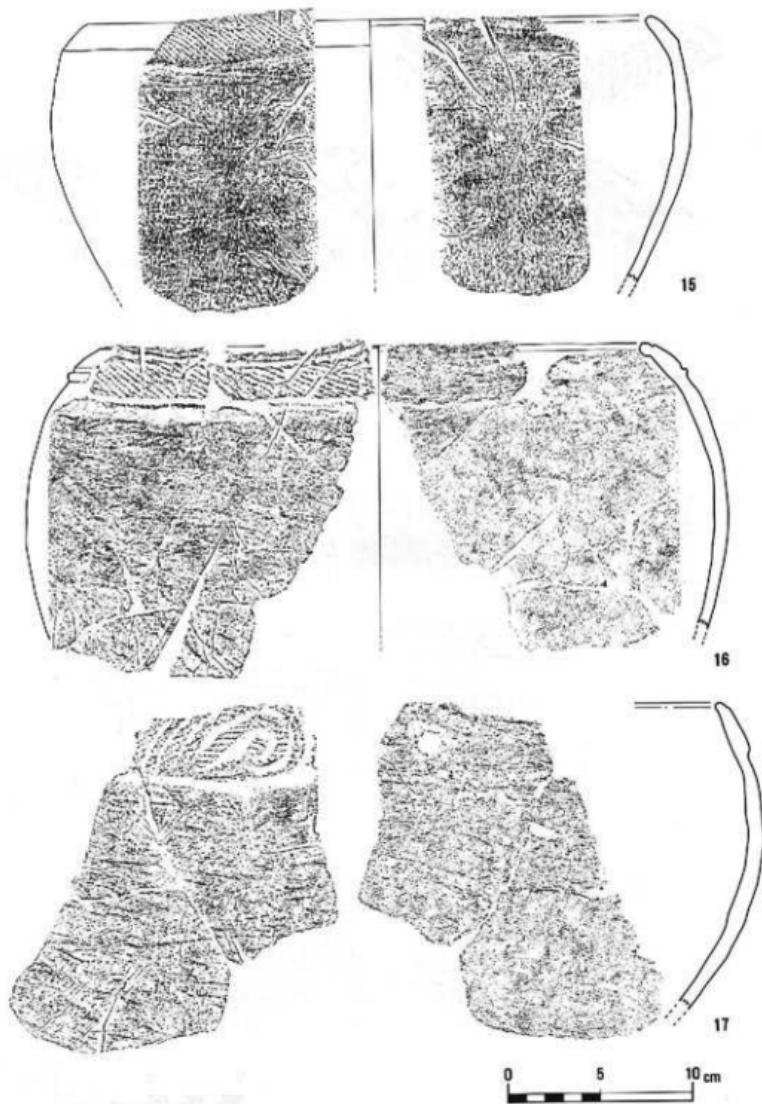
10



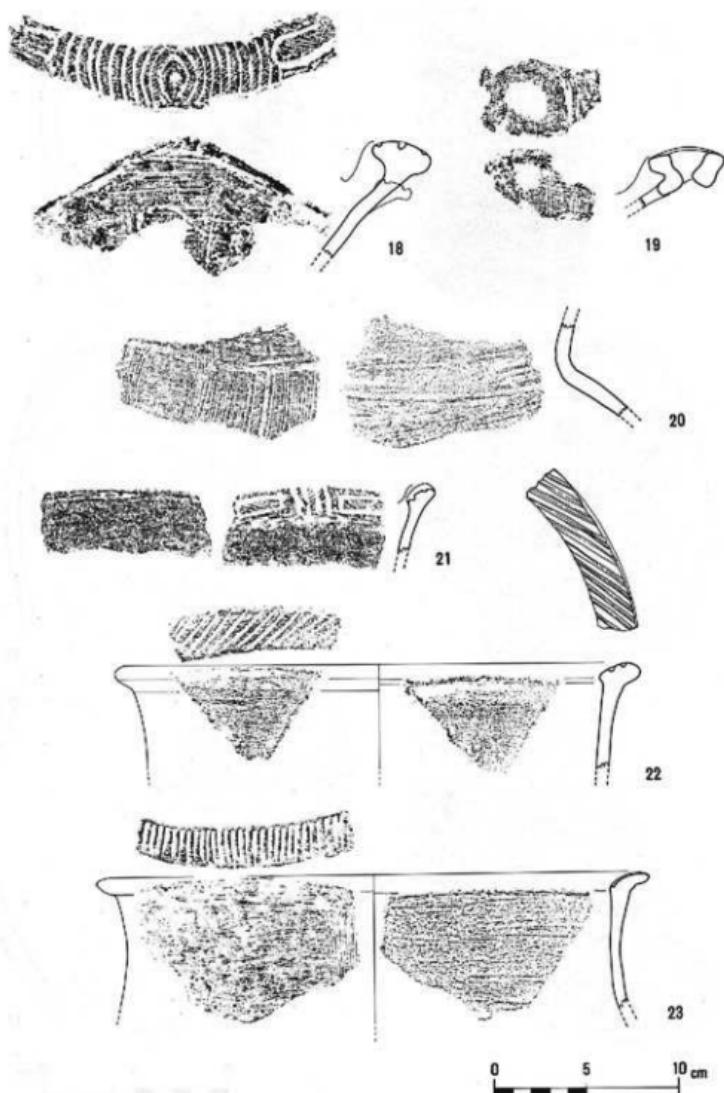
第5図 F-16 南拡張区出土 B群土器



第6図 F-16 南拡張区出土 C群土器



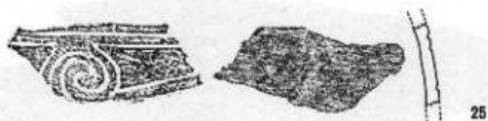
第7図 F-16 南拡張区出土 C・D群土器



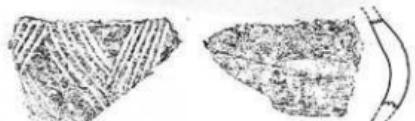
第8図 F-16 南拡張区周辺出土々器 (1)



24



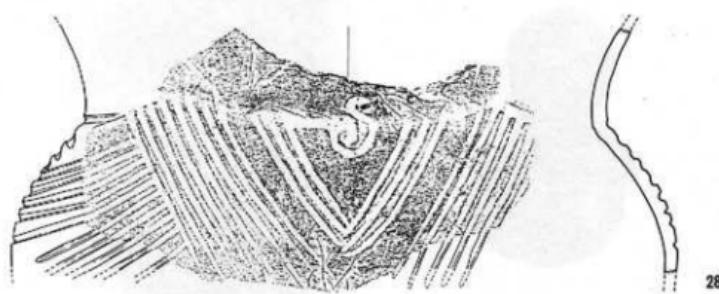
25



26



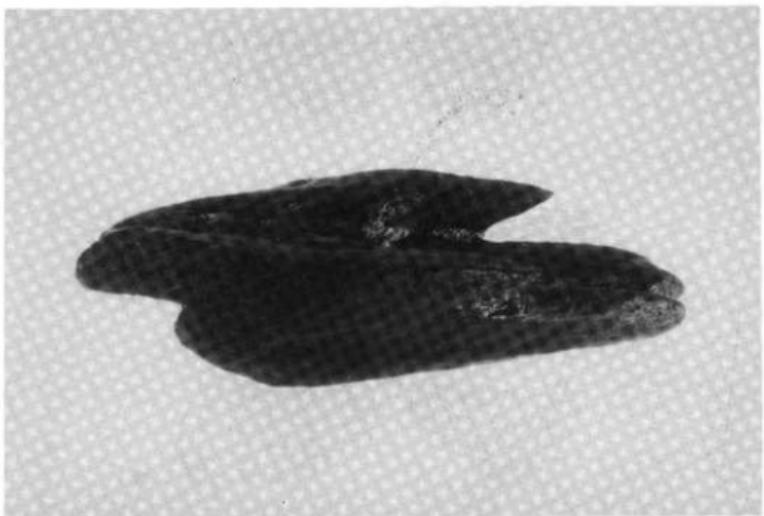
27



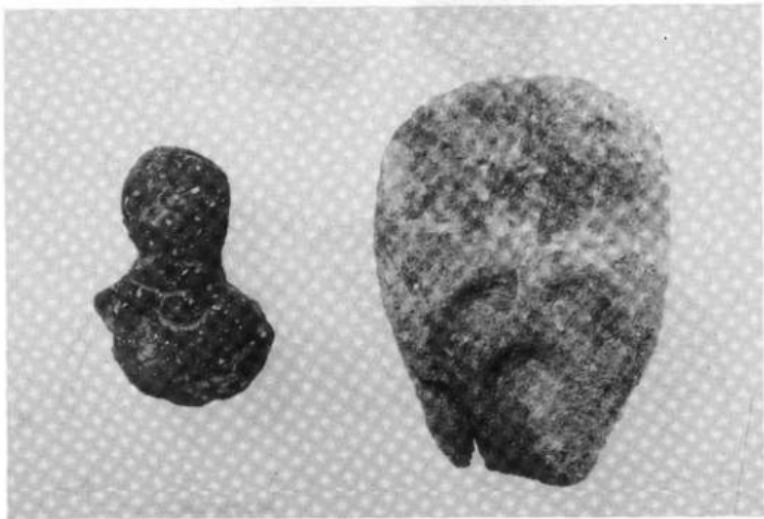
28



第9図 F-16 南拡張区周辺出土々器 (2)



鳥形木製品



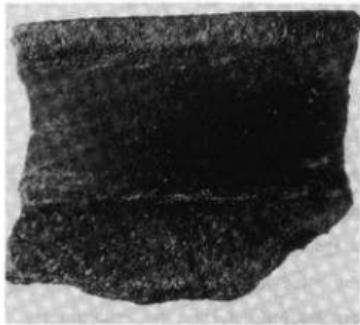
土偶及び土版（土版は弥生時代前期）



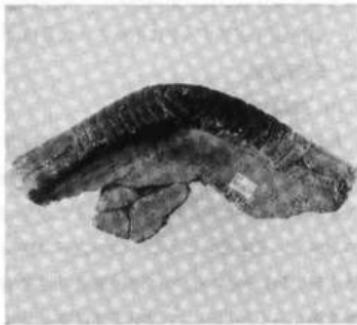
縄文土器 (1)



縄文土器 (2)



縄文土器 (3)



縄文土器 (4)



縄文土器 (5)



縄文土器 (6)

西碑殿遺跡

1. はじめに

西碑殿遺跡は昭和60年2月4日から昭和60年4月30日にかけて本調査が実施された。調査対象面積は4,400m²であったが、調査区の中央付近で未買収地800m²が未調査のまま残った。

未買収地はⅣ区A・E列-13・17に位置する。東西両側では弥生時代・奈良時代と考えられる掘立柱建物群を多数検出した。建物群のいくつかは未買収地に向かってのびているものもあり、用地買収の契約が整いしだい本調査の必要性がいわれていた。

昭和61年7月上旬に発掘調査を実施することについて地権者の承諾が得られたために7月28日～8月8日にかけて本調査を実施した。

また同年10月13日に墓地移転にともない経塚が発見された。位置は遺跡の西辺にある丘陵地上で、Ⅲ区A-9グリッドにあたる。10月14日～10月17日にかけて調査を実施した。

2. 未買収地

(1) 遺構について

検出した遺構は掘立柱建物8棟、溝状遺構5条、ピット、土坑である。

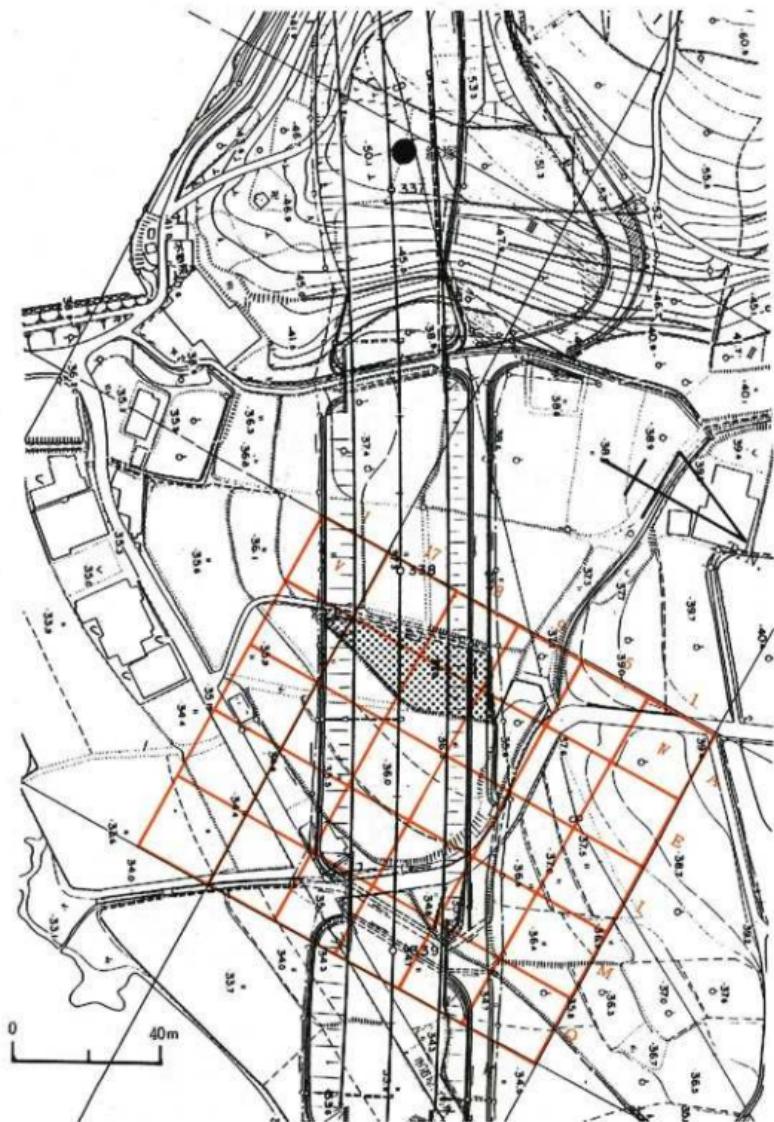
掘立柱建物は1×2間のもの4棟、2×2間のもの1棟、3×3間のもの1棟。調査区外に柱穴をもつために規模不明のもの2棟である。柱穴の掘り方の形状は、方形あるいは方形に近いものが多い。SB8601、02、05は方形の柱穴と円形の柱穴の両方をもつ。柱穴から出土する遺物は小量で破片が多いために建物遺構の明確な時期については言及できない。しかし、いずれの建物遺構からも須恵器（7世紀半ば以降）が出土し、中世遺物が出土しない。従って建物遺構は、7世紀半ばから11世紀頃という大まかな時期を与えることができる。

SB8608については、第7図4・5の須恵器が1柱穴より出土している。他の柱穴から出土した遺物もこれらの須恵器とほぼ同時期と思われるため、SB8608は7世紀後半から8世紀初頭の建物遺構といえる。

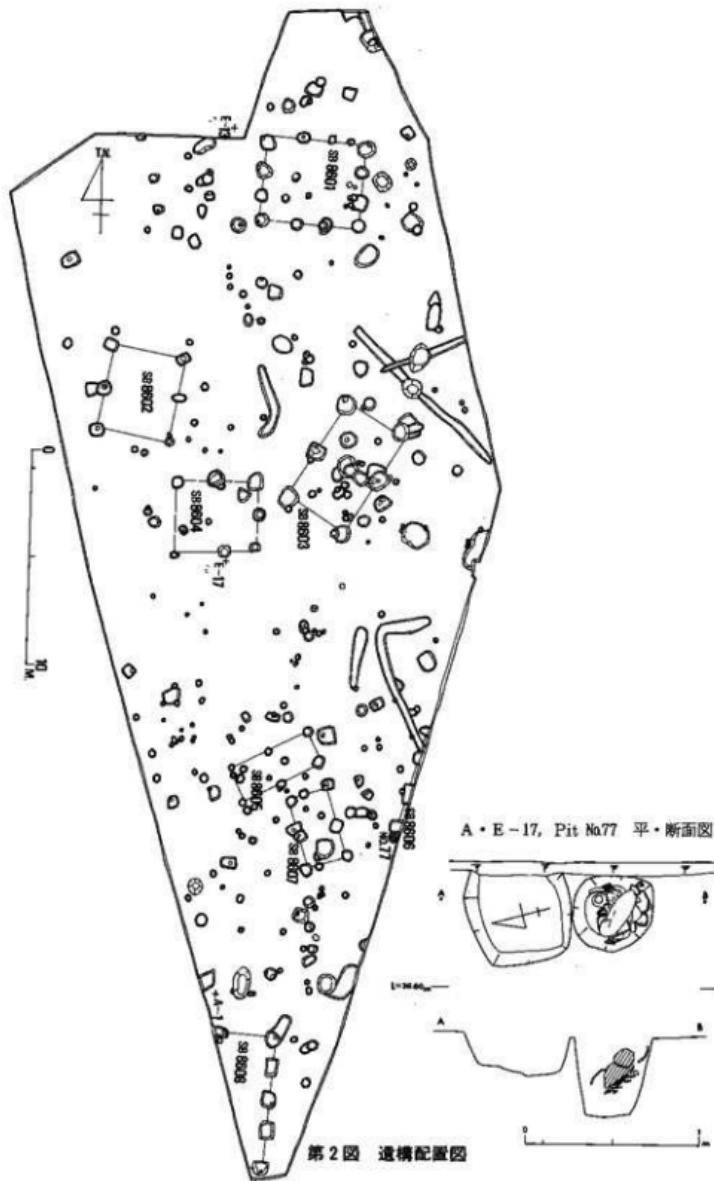
柱穴の埋土については、SB8601、02の埋土は黒色粘土である。他は、おおむね暗灰褐色粘質土である。また建物遺構の主軸方位は、それぞれ違っており統一性は認められない。

ピットに関しては円形のものと、方形もしくは方形に近いものに2分される。方形を呈するピットからは、7世紀末から8世紀前半の須恵器と9世紀後半から10世紀前半の須恵器も出土する。各ピットについての遺物の詳細な検討はしていないが、ピットの形状の違いは時期差を反映するものとは言えない。

またA・E-17-Pit77からは弥生時代中期後半の壺が4個体分出土した。うち3個体は復原してほぼ完形となる。ピットの時期はピットの形状、埋土で区別できないが、出土遺物より、弥



第1図 西碑塚遺跡グリッド配置図



生時代中期後半、7世紀後半から8世紀前半、9世紀後半から10世紀前半の3時期のものが存在するといえる。

(2) 遺物について

出土した遺物はコンテナで8杯程度で、弥生土器・土師器・須恵器・中世土器・石器などである。土器は、ほとんどが小片で時期決定ができる良好な残りのものは極めて少ない。石器は石鏃・スクレイバーなどが少量出土している。

第7図の10点を図化した。1～3はA・E-17, Pit 77から一括で出土した壺形土器である。いずれも復原してほぼ完形となる。1は口径10.2cm, 器高21.9cmを計る。球形状の胴部を有し、比較的長い頸部から口縁部が横方向に開く器形を持つ。最大復径は胴部中央付近である。口縁端部を上下に拡張させ、内傾する端面を造り出している。そこに明瞭な凹線を3条施している。口縁部の内面には円形浮文3個と棒状浮文2個が認められる。口縁部の約1/3を欠損するために浮文の全体の数は不明である。頸部から体部上半部の外面には縱方向のハケ目が施されている。体部外面の下半部はハケ目の後に縱方向のヘラミガキを施している。口縁部外面から内面にかけては、ていねいなヨコナデが、頸部内面にはナデが施されている。体部内面には比較的難な仕上げで縦方向の指ナデの痕が全面に遺存し、部分的にハケ目が認められる。色調は外面が赤褐色と内面が暗茶灰褐色を呈する。焼成は良好で胎土は堅緻である。

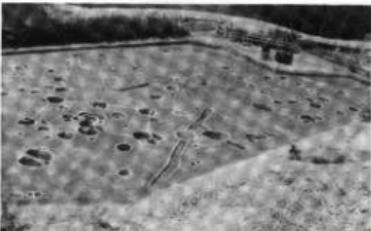
2は口径9.5cm, 器高20.1cm, 3は口径10.0cm, 器高20.9cmを計る。器形・整形とともに1とほぼ同様である。2は口縁部内面に1個の円形浮文が認められ、口縁端部に2条の凹線文が施



第3図 調査区全景（北より）



第4図 調査区南半（東より）



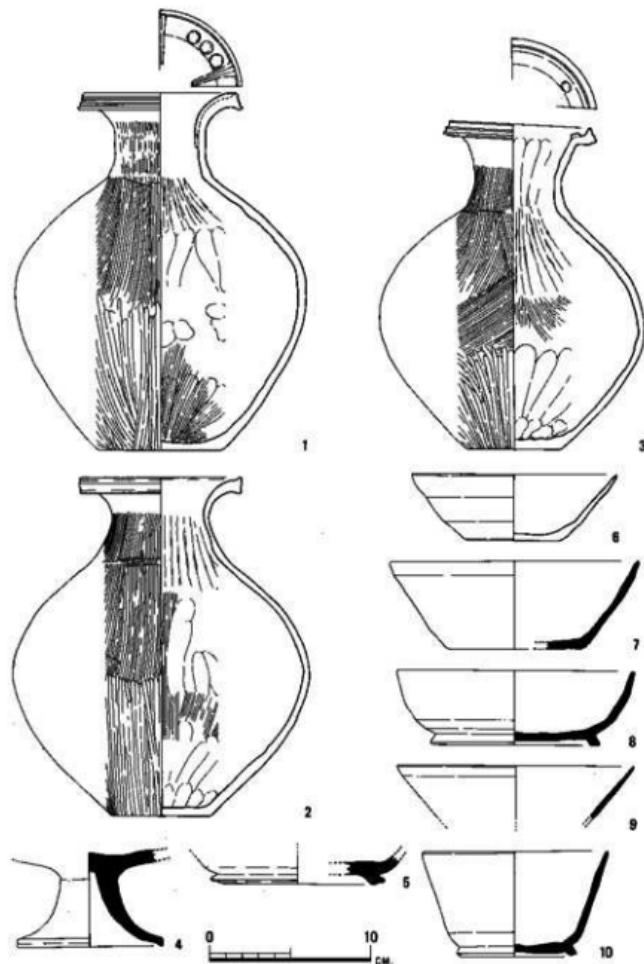
第5図 調査区北半（東より）



第6図 土器出土状態（A・E-17, Pit 77）

されている。3は口縁端部の面を垂直にとり、浅い凹線を2条施している。色調・焼成・胎土とも1とほぼ同様である。

4・5はSB 8608の1柱穴から出土した。4は須恵器の低脚杯である。脚部は脚端にいくにしたがって餘々に細くなる。脚端部は、やや下方に拡張させている。端面には強いヨコナデが施



第7図 土器実測図

されているために浅い凹みが認められる。器壁内外面ともにヨコナデが施されている。暗灰青色を呈し、焼成は良好で、胎土は微砂粒が多く含むが密である。7世紀半ば。

5は須恵器の壺の底部である。外側に強くふん張る高台をもつ。器壁内外面はナデが施されている。色調は灰色を呈し焼成は良好、胎土は密である。7世紀末～8世紀初頭。

6～9はピットから出土し10は包含層から出土した。6・9は同一のピットからの出土である。6は体部が外反しながら立ち上がる。土師器の壺と思われる。体部内外面にはヨコナデが底部内外面にはナデが施されている。色調は淡い橙色を呈する。器形・整形が7と著しく類似するために焼成不良の須恵器の可能性も考えられる。推定口径12.6cm、器高4.1cmを計る。

7は推定口径15.3cm、器高5.4cmを計る須恵器の壺である。体部は外反しながら立ち上がる。体部の上部と中央部から下部にかけての2箇所にゆるやかな凹みが認められる。6とほぼ同一の器形である。体部内外面にはヨコナデが、底部内外面にはナデが施されている。色調は灰色を呈し焼成は良好である。9世紀後半～10世紀前半。

8は推定口径14.5cm、器高4.6cmを計る須恵器の壺である。体部は内彎しながら立ち上がり口縁端部を丸くおさめている。体部と底部の境に長方形状の外にふん張る高台をもつ。体部内外面にはヨコナデが底部内面はナデが施されている。底部外面はヘラ削りの痕が残る。白灰色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の微砂粒を多く含む。7世紀末～8世紀初頭。

10は推定口径11.5cm、器高6.5cmを計る須恵器の壺である。体部は下半部で彎曲し外反しながら立ち上がる。体部と底部の境に外にふん張る長方形状の高台をもつ。底部内面および体部外縁に灰緑色の自然釉が付着する。器壁内外面とともにヨコナデが施されている。暗灰色を呈し焼成は良好である。7世紀末～8世紀初頭。

(3)まとめ

西碑院遺跡で検出した方形の掘り方の柱穴をもつ掘立柱建物には弥生時代中期のものと奈良時代のものがあると考えられていた。しかし両者を区分する根拠は明らかでなかった。柱穴からの遺物の検出状況、埋土の違い、柱穴の掘り方の形状の違いなどに注目して未賃收地の調査を実施した。

調査結果は次のように要約することができる。

- 検出した掘立柱建物は、おおむね7世紀末から11世紀頃のものである。弥生時代中期の建物は検出されなかった。
- SB 8608は7世紀末から8世紀前半の時期が与えられる。
- A・E-17, Pit 77の遺物の検出状況より弥生時代中期後半の建物遺構が存在する可能性は高いと言える。
- 埋土の違い、柱穴の掘り方の形状の違いで時期差を区分するすることはできない。
- ピットの時期が弥生時代中期後半、7世紀末～8世紀前半、9世紀後半～10世紀前半、中世の

4時期になる。据立柱建物もこの4時期に分かれる可能性が強い。

詳細は今後の検討を待ちたい。

3. 経塚

1. 調査の概要

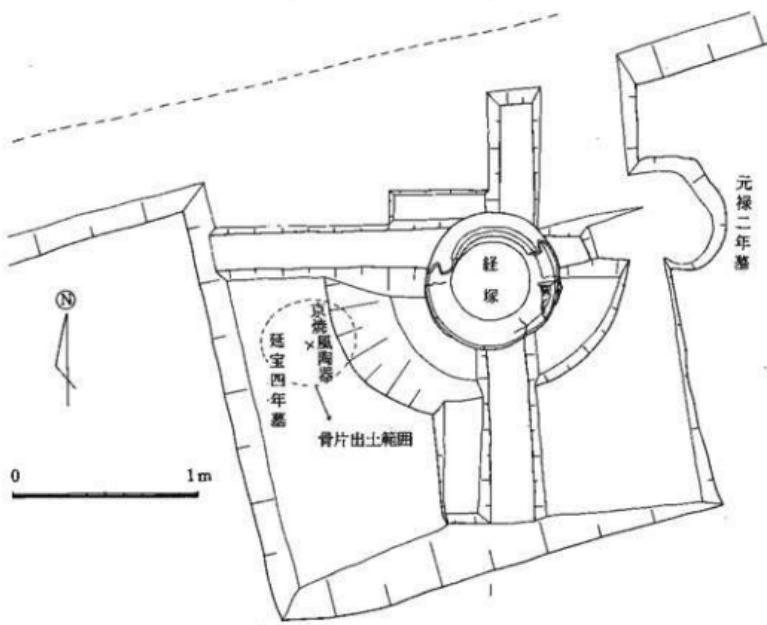
碑殿経塚は普通寺市碑殿町字三反畠730-1に所在し、標高約50mの山腹に宮まれた墓地の北縁に立地する。

当初、この遺跡は発掘調査の対象遺跡としてマークされていなかった。しかし、四国横断自動車道建設に伴う墓地移転のために掘削中、壘の中から小石が多数出土し、その中には墨書きがあるものもみられたため、県教委に連絡があり、緊急に調査が行われることになった。

調査は昭和61年10月14日～17日の4日間実施した。当初、調査は経塚を目的として実施されたが、経塚にはもと石碑があり、しかも東西に墓碑が立ち並んでいたことがわかり、所有者である子孫の方の御配慮により、移転先の石碑や文献の調査もあわせて実施した。

2. 遺構

経塚・近世墓とも石碑はすでに除去されており、経塚の土師質容器が露出した状態で調査が実



第8図 経塚平面図（トレンチ図）

施された。

経塚は一字一石經と呼ばれるもので、土師質容器がほぼこの直径にみあう大きさの土坑に掘えられていた。調査時にはほとんどの経石が外にかき出されており、土師質蓋も小片となって散乱していたが、もとは土師質容器に経石を入れ、蓋をした上に石碑が立てられていたようである。

後述する碑文から明らかのように、この経塚は、東西に埋葬された両親の追善のために、子の菅納市衛門俊信が建立したものである。

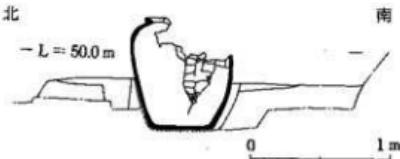
経塚の東の墓は、もとあった墓碑によれば、元禄2(1689)年に没した父親の菅納彦兵衛為信(隨心院了督)の墓であるが、経石容器の約50cm東に掘りかえされた墓塚の一部を検出したにとどまる。

また、経塚の約0.5m西にある墓は、墓碑から、菅納彦兵衛為信の妻であり、延宝4(1676)年に没した鏡月院妙教の墓であることがわかったが、約0.5mの範囲に遺骨片をおいた上から完形の京焼風陶器の碗が出土した。

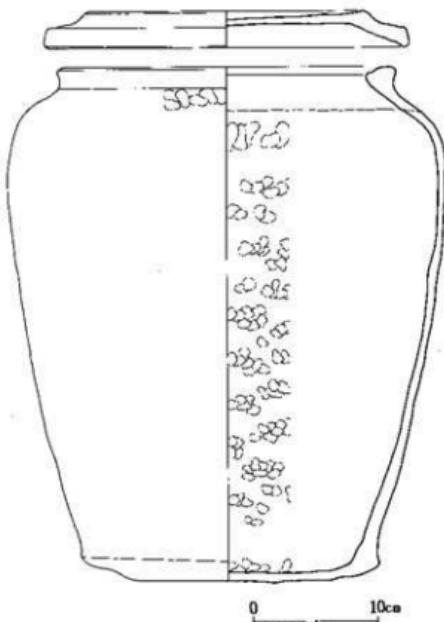
3. 出土遺物

一字一石經 土師質容器から、28枚入りコンテナで約4杯分に達する多量の礎が出土した。礎のはほとんどは2~5cm大の平たい河原石で、角礎はほとんど含まれていない。これらの礎のうち、約10分の1程度には片面に一字が墨で書かれており、略・我・五・志・越・種・養・雖・羅・事・世・主・向・白などの文字が確認できる。墓地の移転前にこの経塚に立てられていた石碑に、「法花八巻」とあるので、法華經の経文の一郎と思われる。

経石容器 蓋付の土師質甕である



第9図 経塚断面図



第10図 経塚容器実測図

が、転用品ではなく、本来一字一石経の容器として作られたものであろう。蓋は直径58.6cm、高さ5.9cmで、一段高く作られた広い天井部と、斜下方にのびた短い体部をもつ。口縁部は下端がやや尖り、嘴状に近い形態である。内外面とも灰褐色～淡褐色を呈し、口縁部内面をヨコナデで、天井部外面をナデで仕上げている。胎土には1～3mm大の砂粒を多く含み、焼成は比較的良好である。

身は肩の張った縱長の体部に小さくくびれた肩をもつ無頬の壺で、高さ82.8cm、口径54.4cm、肩部最大径70.4cmを計る。口縁部内外面はヨコナデで仕上げているが、体部内面は指頭による押えの上を横方向の板ナデで調整し、体部外面には斜方向を主体としたナデを施している。胎土・焼成は蓋と同じである。

京焼風陶器 経塚容器の約70cm西から骨と共に出土した
ものである。発掘調査時には墓石は取り除かれていたが、移転前の写真と、子孫の方に対する聞き取り調査によって、経塚を築いた菅納彦俊（柳陰）の母親である觀月院妙教の墓石がここに立っていたことが明らかとなった。墓石には

(表) 延宝四丙辰年

觀月院妙教

七月四日

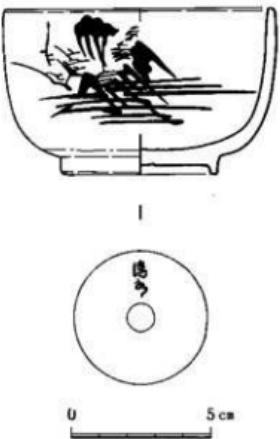
(側面) 菅納彦兵衛為信

妻

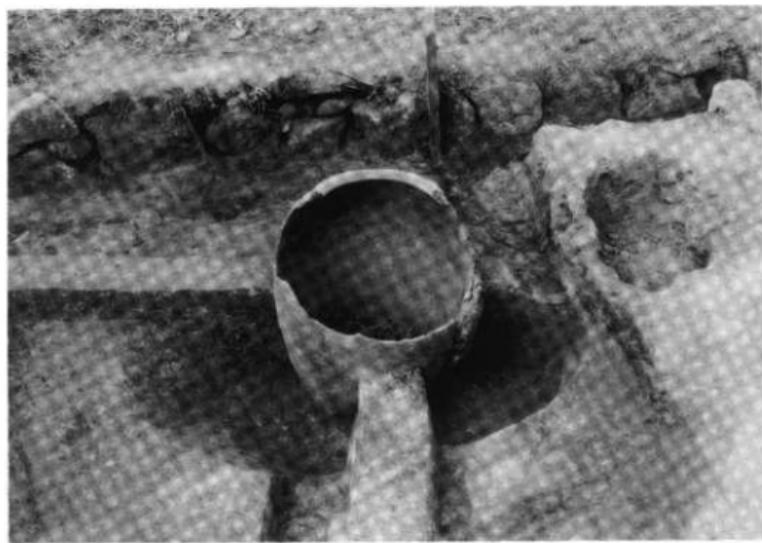
とあり、延宝4(1676)年に没したことがわかる。

京焼風陶器は口径9.8cm、高さ5.9cmの壺で、高台部及び高台内側を除いて施釉されている。釉は淡灰綠色味をわずかに含む透明釉で、胎土の色を反映して濁った淡黄褐色をしている。内外面ともカン入が著しい。外面には濁った淡青灰色の須でやや崩れた山水を描くほか、その側面にも横線とその左端に点を描いている。胎土は灰白色ぎみの淡灰褐色で、精良である。焼成も良い。高台内側の外底面には「清水」の刻印が認められる。

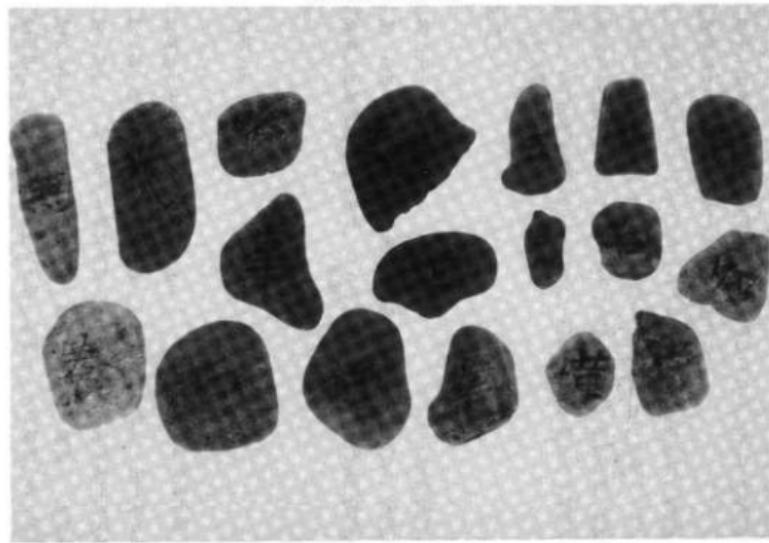
墓石の銘文からみて、この京焼風陶器の壺が17世紀後半～末に比定されることは明らかであり、この種の陶器の編年基準資料として注目される。



第11図 京焼風陶器実測図



第12図 経塚遺構



第13図 一字一石經

4. 菅納氏と經塚

最初に、經塚の経碑銘と、被供養者・宮造者の墓碑銘を示す。

(1)

(1) (裏面) 法花八卷	(裏面) 菅納氏市右衛門尉俊信
經塚	二親隨心院了善 観月
一字二石	院妙教為菩提書寫埋
(2) (裏面) 延宝四丙辰年	(裏面) 菅納彦兵衛為信
觀月院妙教	妻
七月四日	
圓寂	
隨心院了善 観靈位	
十二月十有一日	

次に、經塚宮造者である菅納氏についての記録を示す。

(2)

(1) (中略)	諸奉行人家持之事
一、菅納巾右衛門	(中略)
(ト) 菅納孫左衛門正信	(家密板謹)
菅納彦兵衛為信	
母ハ多度津義氏	
之女妙信	
橋殿村二別家候不詳年月今常住寺則屋敷跡也云。彼寺ハ、禪宗ニして、開祖ハ元禄年中の由、されハ、俊信御當地へ引取後、寺ニいたせしと勿論也。且又、俊信引取付而ハ、牛角寺といふ寺へ田地少々寄附いたし、夫婦の墓斎祭り方を、頼しと、彰信いへり。○證記・唐昌の記ニ、為信ハ橋殿むらニて大百姓也という。有矣様時代、普通寺と彼は出入り一件、為信物語り致、俊信筆記せし物御記録處たり。	
元禄二巳年十二月十一日卒。齡不詳隨心院了善信士。齡のことは、家ニても分り不申	
（右側面）	
己酉八月三十日	
壽七十有三	
（裏面）	

(八六二)

候、盛好念として文久二戊午八月十六日、わさ（小谷福太郎、常住寺へ遣、住僧居合いろ／＼尋候所、其寺ハ持宝院なるへして教へられ行し處、住僧留主^{（寺）}其辺ニ百姓段々居合相尋候所、老人婦り道立て、弥谷寺上り口地蔵尊ある右側小高地處、夫婦の墓題を教へられ參りし處、苔生て文字分りかね水ニひたしなんといたせしかと年齢記し無之候、残念之持宝院ハ、牛角寺ノ院号と見へたり。

妻多度津綾又左衛門正次女延宝四辰七月四日卒齡不詳妙教信女

菅納市右衛門俊信 法号柳陰

元禄年中之末橋殿村仕候也、御當地ニ帰菅納柳陰何々と記有之、僕居分類歟、勤方記候無之候、山下如清・山下宗範杯同様か、享保五〇年十一月廿六日、内町金川屋小次良上通りの御礼、半七より四歳相頃、柳陰を以多聞院へ申出評議いたし伺候處、後年ニ至り多く相成候ニ付、追而御沙汰可有之旨柳陰へ返答致候事有
（享保九辰十二月廿八日江戸へ罷越候得共、御扶侍下候、壹人

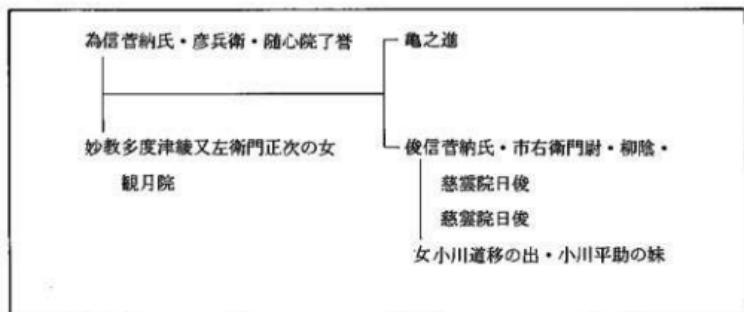
扶侍か、御てあの地逗留中、火方心得事指越御記録是ニ有、有徳院御代ニして、いろは組の火消役御立被成候時分ニ、同十
二未年壬正月細井廣洋よりの事

而写

貴札恭致拝見候、餘處無御座候へき

二ツ口

上記の経碑銘・墓碑銘・記録によって作成した菅納氏の系図と年譜を示す。



(1600)

菅納為信、備前国金川村より來瀬、穂殿村に住す（ホ）。

(1650)

延宝4（1676）妙教、死す（ロ）。

この頃、菅納亀之進、金比羅有山僧正に仕えるが若死、

代って、菅納俊信が仕える（ヘ）。

- 元禄2(1689) 大百姓為信、死す(ハ)。
 後信、樋殿村から金比羅へ引越す(ヘ)。この時、両親の
 墓守り代として田地を牛角寺に寄附する(ト)。
- 享保9(1724) 後信、江戸へ赴く(ト)。
- 享保14(1729) 後信、死す、73歳(ニ)。
- 文久2(1862) 盛好なるもの、為信・妙教夫婦の墓を尋ねさせる(ト)。

菅納俊信は、樋殿村の大百姓菅納為信の二男、兄の病死に伴い若時から金比羅に仕える。同宮における地位は「諸奉公人家持」の1人であった。俊信の後も子孫は、代々金比羅に仕えている。

俊信は、経塚の营造者である。その目的は、「二親」の「為菩提」、両親の追善供養であった。营造時期は、父為信が死去した元禄2(1689)年から俊信が死去する享保14(1729)年までの間であるが、精確な年月日は不明である。ただ、一つの可能性としては、俊信が樋殿村を去る時に牛角寺へ墓守りを依頼していることを考慮すると、父為信が死去した元禄2(1689)年から数年の間ということが考えられる。

なお、菅納氏においては、文化13(1816)年にも、「為教先祖代々別廟圓居士」に「書石法華經供養塔」を造立している。廟圓こと「菅納與兵衛芳信」は経塚造立の2年前、文化11(1814)年に死去している。菅納氏において経塚营造は、伝統となったといえよう。

(3)

注(1) (イ)(ロ)(ハ)は、横断自動車道用地内の善通寺市碑殿町字三反畠730-1に所在する。この3基は南面して並立つ。中央に(イ)、左方に(ロ)、右方に(ハ)の位置となっていた。(ニ)は仲多度郡琴平町川西に所在する菅納氏の墓地にある。(イ)(ロ)(ハ)は、1986年10月に琴平町の同氏の墓地内へ移転された。

(2) (ホ)は宝曆7(1757)年の成立。(ヘ)は文政5(1822)～慶応2(1866)年の成立。ともに香川県教育委員会編『新編香川叢書史料(1)』に所収。(ト)は、菅納俊彰氏(仲多度郡琴平町甲891)所蔵である。

(3) 菅納氏の墓地内に所在する。この経碑の右隣には、被供養者たる菅納芳信の墓碑がある。



利生寺古墳

古墳は、鬼ヶ臼山の最末端の小尾根上に立地する。標高は、約44m。西方には、高瀬川・平野・瀬戸内海を見通せる。古墳は、近・現代の開墾によって、大きく破壊を受けている。石室に利用された石は、羨道部に基底石が3個残るのみであった。

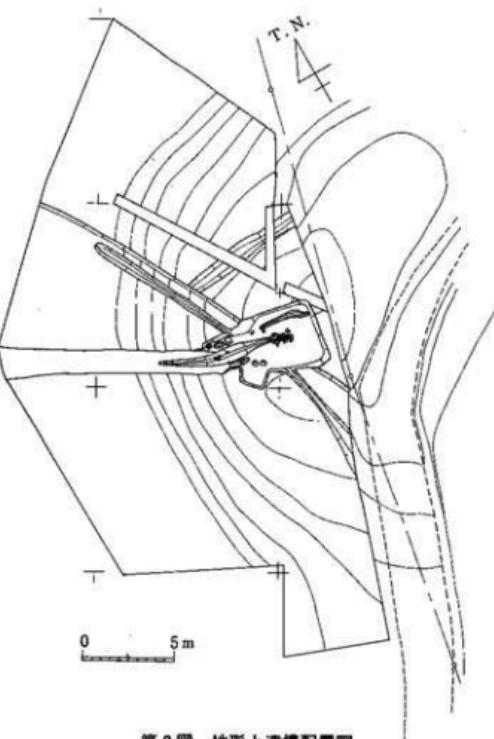
墳丘の形状・規模は不明である。羨道は、西方に開口し、内巾0.8m、長さ2.8m、高さは不明。中央に排水溝が貫通する。排水溝は、羨道外へ、さらに2.4m伸びていた。最奥部埋土中から須恵器が多く出土した。

玄室部には、石室構築に使用された石は1個も残存していなかった。掘り形の規模は、巾3.8m、奥行き4m、深さ1.1m、形状は、奥行きがやや長い長方形である。北壁下の床面には、基底石の据え穴が残っていた。床面中央付近からは、羨道へ続く排水溝が掘られていた。溝内には、小礫を詰めていた。この小礫の上面から耳環が2点出土した。

排水溝内から、身と蓋を入れ子状にした須恵器の杯が3セット出土した。羨道部の埋土中から、須恵器の环・高环・魁・平瓶・横瓶



第1図 ○印が利生寺古墳（国土地理院25000分の1仁尾）



第2図 地形と遺構配置図

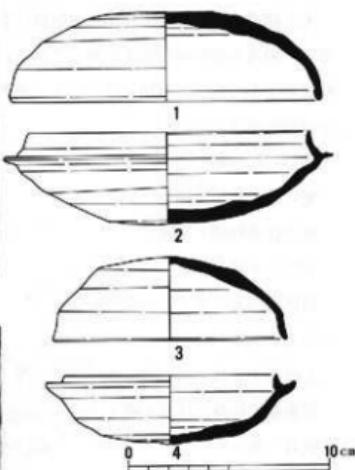
・壺・甕、土師器の駆が出土した。耳環は、銅製で渡金の跡があった。



第3図 発掘調査風景



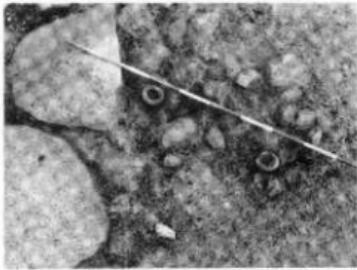
第4図 菱道・玄室(西から)



第5図 遺物実測図



第6図 排水溝出土土器



第7図 耳環

矢ノ岡遺跡

矢ノ岡遺跡は、高瀬川南岸の河岸段丘上に立地する。調査区は、段丘がちょうど途切れる先端部と、段落ち部の両方にまたがってある。前者については、調査区の南方で宅地造成中に石製五輪塔が出土したことが知られている。後者には、「土佐神社跡」と称する径約1.5m、高さ約0.5mの塚が現存していた。

○検出した遺構

竪穴住居跡(1棟)

掘立柱建物跡(8棟)

土坑(4基)

溝状遺構(6本)

○出土した遺物

土師器(高壺・鉢・甕)

須恵器(壺身・壺蓋・甕)

瓦器(板)

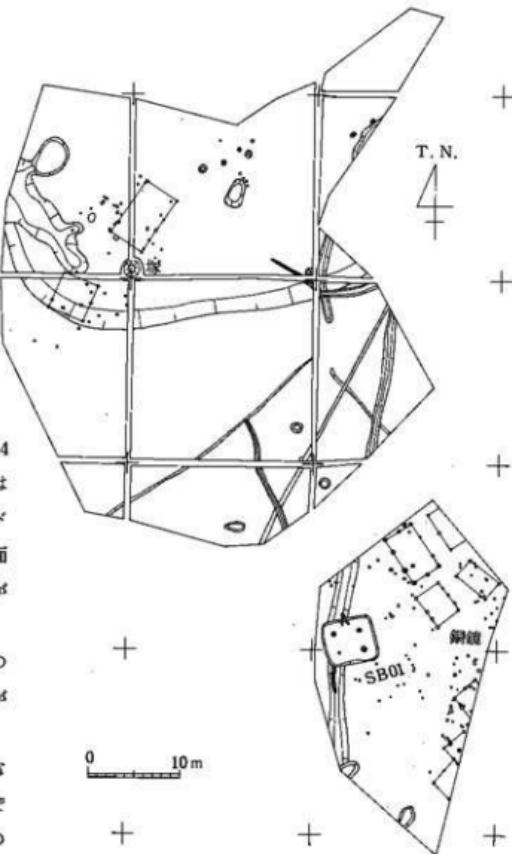
土師質土器(皿・壺・鍋・釜)

銅鏡(八稜鏡)

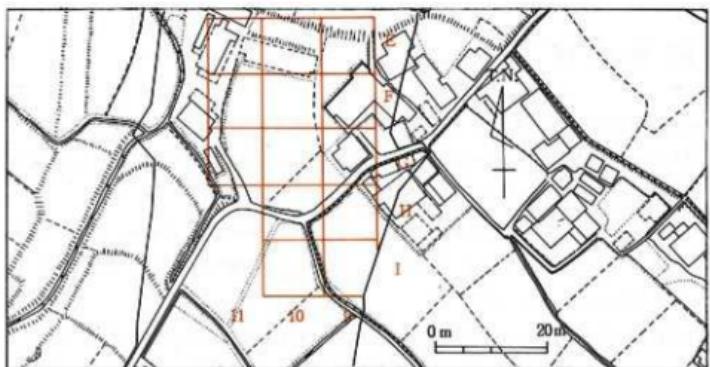
竪穴住居跡(SB01)は、6.4×5.0mの隅丸方形。主柱穴は4穴である。作り付けのカマドを有する。南西隅から竪穴壁面をトンネル状に抜いて、つながる溝状遺構をもつ。

掘立柱建物跡は、鎌倉時代のものが多く、その前後のものが少しあると考えられる。

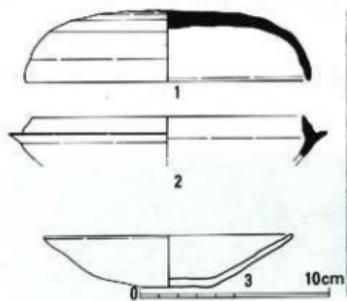
塚は、3層の土層によってなる。土層は、ほぼ水平に分層できる。最上層から土師質土器の壺が出土した。



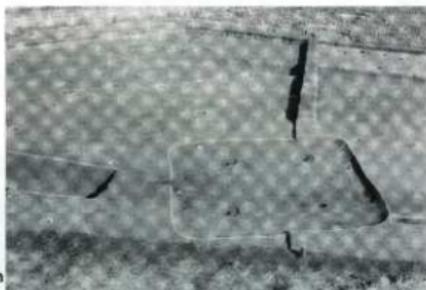
第1図 矢ノ岡遺跡遺構配図



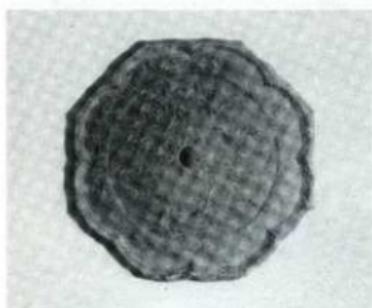
第2図 矢ノ岡遺跡グリッド配置図



第3図 1・2はSB01出土、3は塚出土



第4図 SB01など(西から)



第5図 八稜鏡



第6図 塚の断面

福岡神社跡

福岡神社跡は豊中町上高野 3360 番地に所在する。陣山から南に向かって派生する尾根の一端に位置するが、東側にはため池があり、西側は工事により大規模に掘削されているために独立丘陵状の景観を呈する。標高は約42mを計る。

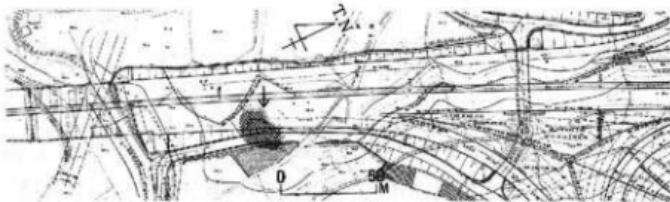
昭和58年度の財田古墳群発掘調査中、地元より「当該地は古墳の伝承がある。」ということを聞き、予備調査の必要性を公団へ申し入れていた。調査の条件が整い、本年度の 6月23日～6月30日にかけて予備調査を実施した。

調査の結果は以下の点にまとめることができる。
①表土より20～30cm掘り下げるところでは地山となる。
②地山は丘陵の傾斜とほぼ同様に南から北へ向かって上がっている。
③石室、周溝などは検出されなかった。
④第1・2・4 トレンチで最大幅 1.5 m、深さ30cmの溝状遺構を検出した。
⑤溝状遺構から出土した遺物は時期不明の土器片数点にとどまる。
⑥溝状遺構は第5トレンチ、北・西の崖状を呈する断面では確認できない。

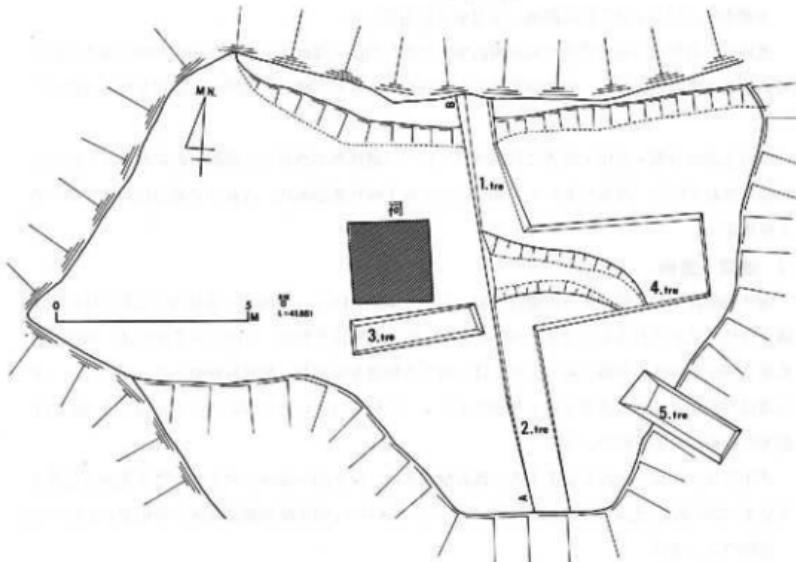
以上の調査結果をもとに本調査の必要性について検討した。溝状遺構の時期・性格は明らかでないが、本調査の必要性は見い出せなかった。



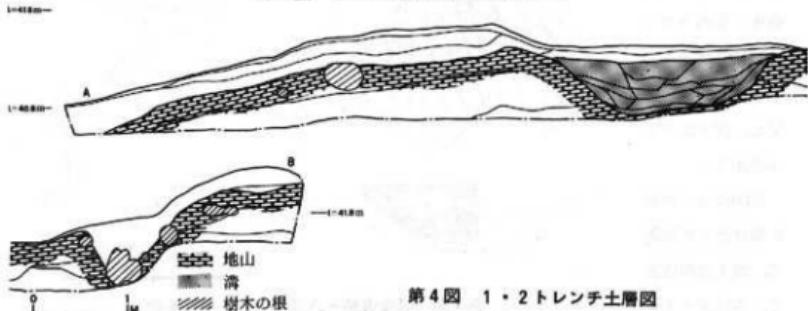
第1図 福岡神社遠景



第2図 福岡神社跡位置図



第3図 トレンチ設定図・遺構配置図



第4図 1・2トレンチ土層図

延命遺跡－八反地地区－2次調査

1. 調査の概要

当所の発掘調査は、昭和59年度に実施したが、当該地に建物が所在していたので、1,000 m²を残して、一時中断していた。61年6月末建物の取り壊しが行われ、7月22・23日予備調査を実施した。

本調査は、61年9月1日に開始、9月30日に完了した。

遺跡は、財田川の支流宮川の右岸微高地に位置し眉山・鳥越山・陣山の山稜が南へ派生した尾根終結部の先端にあたる。昭和58年度に発掘調査を行った「城岡」地区とは宮川を挟み対峙している。

宮川上流の白坂・高塚・向谷には古墳群や弥生の遺跡群が点在し、銅劍・銅鏡が伴出したことは注目されている。源流にあたる二宮には、大水上神社叢があり、古瓦の窯跡が保存されている（県指定）。

2. 遺構・遺物

溝状遺構は、弥生時代末～古墳時代初のもの3本（SD01, SD02, SD05）と平安時代末～鎌倉時代に比定されるもの2本（SD03, SD05）が検出された。SD01とSD02は、南西から北東方向に平行する流路をもつ。埋土は、暗黒茶褐色を呈すが、床面は砂層となっている。二本の溝は、南東～北西に流れる溝（SD03）によって切られていると想定される。切りあい関係は、後世の搅乱のため不明である。

SD05は、南東～北西に支走する。最大幅1.3 m、深さ30～40cm。埋土は、暗黒茶褐色粘質土を呈す。この溝は、北西方向に走り、第2調査区からさらに、59年度発掘調査区の検出溝にと繋がる。

SD03は、古代

末～中世の細溝で、

南東～北西へや、

蛇行気味に走る。

埋土は、暗灰色を

呈し、深さ30～35

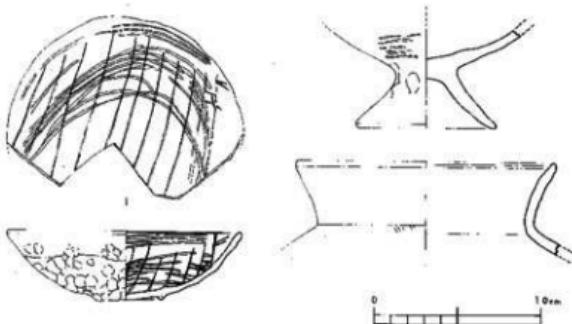
cmを測る。

SD04は、砂層

に埋り込んだ細溝

で、埋土は暗灰色

で、古代末～中世



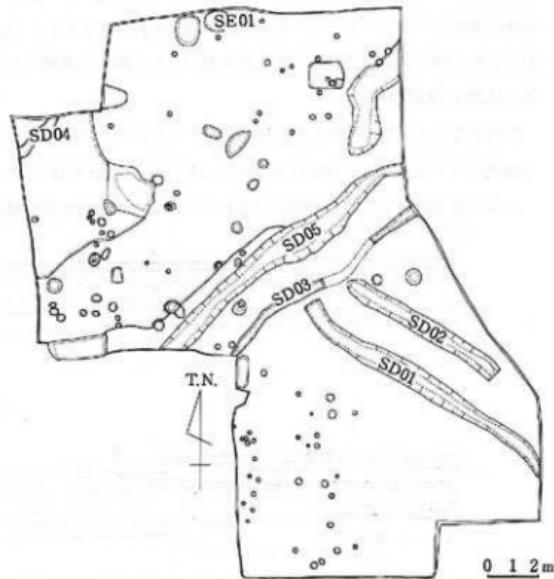
第1図 延命遺跡－八反地地区－出土遺物



に比定される。

井戸(SE01)は、調査区の北端で検出された。径1m、深さは、遺存しているもので80cmを測る。川原石を立てたように1段構築しその下部に木製の曲物を据え付けている。八反地地区全域で、鎌倉時代3、江戸時代1の井戸を検出したことになる。

建物跡は、後世の搅乱がひどく、復元することは出来ないが、柱穴の並びと推定される箇所があり、4棟程度が建物跡と想定される。



第3図 遺構図

一の谷遺跡群

1. 調査の概要

一の谷遺跡群は鈴音寺市古川町・本大町・中田井町・吉岡町という、北の財田川と南の洪積台地の間の沖積平野一帯に所在する。弥生時代後期を中心とした遺構あるいは遺物の包蔵が確認されている。

今年度の調査は、竹道地区の一部（古川町字竹道、旧Ⅲ区Aの一部）と平塚地区（古川町字平塚・香門、中田井町字平塚、本大町字本村道西上・江藤道西、旧V区・VI区）全域、計16,000m²を対象とした。これで、昨年度の山ノ前地区（旧Ⅲ区B・IV区）、竹道地区（旧Ⅱ区・Ⅲ区A）、香門地区（旧I区）を合わせ、全調査対象面積36,100m²を完掘した。

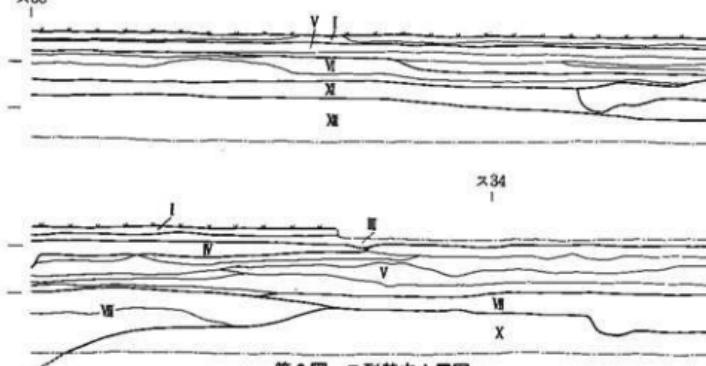
今年度の竹道地区の調査では、須恵器を含む包含層に刻まれた現地割方向に一致する平安時代末の溝状遺構と、その包含層を除去して弥生時代前期から古墳時代にかけてのおびただしい溝状遺構を検出した。

平塚地区では、弥生時代前期の竪穴住居跡2棟と土坑を多数、同終末期の竪穴住居跡29棟と竪穴状遺構と土坑を多数、及び近世の掘立柱建物とおびただしい土坑群、等々を主として検出した。当時の遺構に伴うものではないが、平行銅鏡の破片も出土した。今回の報告は、第1遺構面で検出した弥生時代前期の土坑と同終末期を中心とした時代の遺構について概略を述べる。

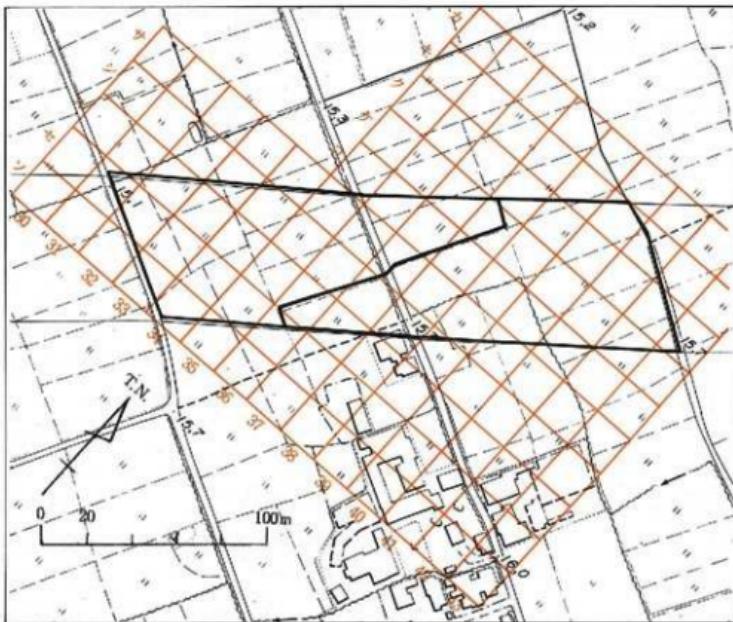
2. 立地と自然環境

今回調査を行った平塚地区の北約250mには財田川がほぼ東から西へ流れているが、この川は当地區付近では、植生や河床の堆積物等から判断すれば中流にあたると思われる。

一の谷遺跡群は全て沖積平野に所在しているが、このうち平塚地区は現地形で標高15m程度で、

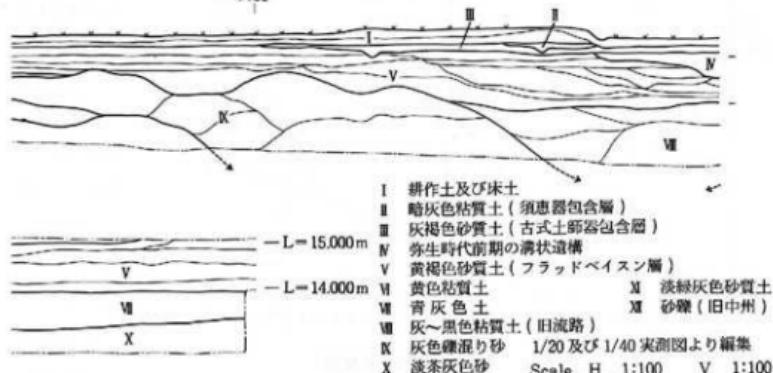


第2図 ス列基本土層図

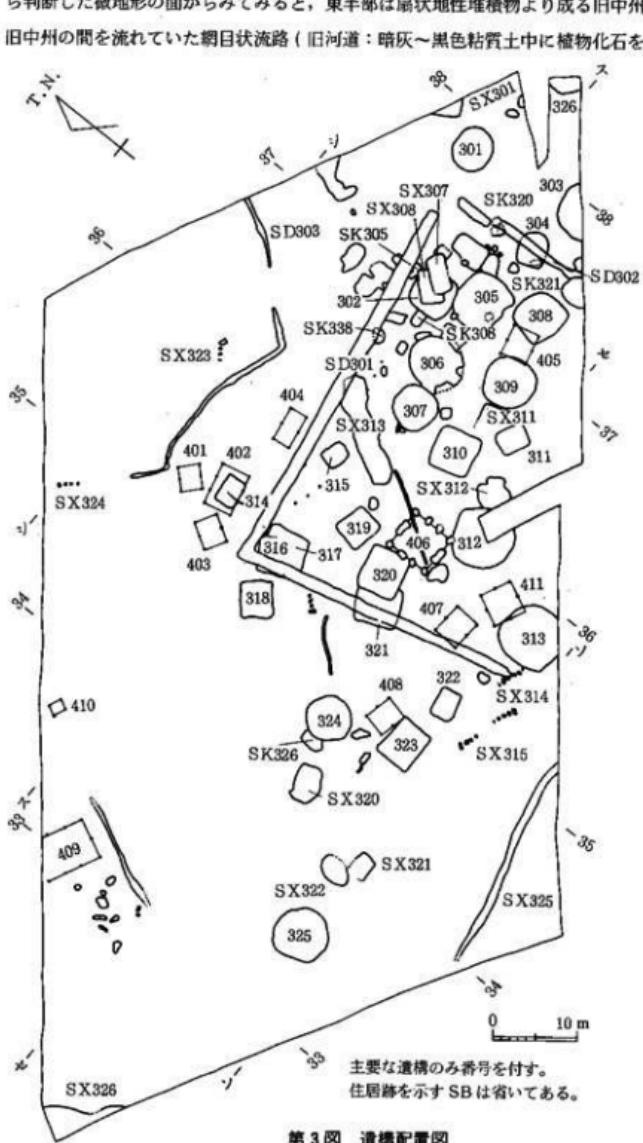


第1図 グリッド配置図

調査区東半分が微高地となっており、ここに弥生時代終末期の生活遺構が密集している。そしてそこから西へ向って緩やかに傾斜しており、西半分はこの時期の遺構は全く検出されず、代わって上から古墳時代以降の遺構面、弥生時代前期の複数の遺構面が確認される。これを土層序等か
ス35



ら判断した微地形の面からみてみると、東半部は扇状地性堆積物より成る旧中州、西半部下部は旧中州の間を流れていた網目状流路（旧河道：暗灰～黒色粘質土中に植物化石を含む）、上部は過去の幾度かの洪水の際に形成されていったフラットベイン層より成っていると判断でき、地形と遺構の関係がよく判る。このフラットベイン層の多くは弥生時代前期の遺物の包含層であり、遺構と遺構面の関係等を合わせて考えてみると、主として弥生時代前期に形成されたものであり、この地域は同終末頃は生活の場として適さないアネクメーネであったのが、古墳時代になって開拓がほぼ終了して安定し



第3図 遺構配置図

た地域になったのであろうと思われる。

尚、当調査区付近の現在の土地利用は、調査区内は全て水田、畠であり、東側に接して東方に集落、西側は西方100m程まで水田、畠が続き、そこから西に集落がある。

3. 遺構

SB 301

南北4.7m、東西5mを測る不整円形の竪穴住居である。住居の主軸は真北より約4°東偏し、四隅に柱穴を確認した。床面中央部に炉跡があり、内部に焼土層を確認した。また、床面北東部に若干の土器集中部分が検出された。

出土遺物については、詳細な検討はまだであるが、鉢形土器・甕等が出土している。

いわゆる庄内式併行期のものと考えられる。

SB 302

SB 302は、上部をSX 307・308に切られ、北端をSK 305に切られている。また、南はSB 305を切っている。

一辺が4m強の円形に近い隅丸方形の竪穴住居で、ベッド状遺構・壁溝をもつ。住居の主軸は真北から約12°西偏している。遺構確認面からベッド状遺構面までは約20cm、土間状部分までは約30cmである。土間状部分の中央から、やや南にずれた位置に炉跡があり、土間状部分の四隅に柱穴を確認した。柱穴の深さは、いずれも土間状部分から50cm前後を測る。

炉跡からは、厚さ約10cmの藁状の炭化層と支脚片等を検出している。また、ベッド状遺構の北東部に、深さ約50~60cm、径約80~100cmの貯蔵穴状土坑を3穴確認した。そのもっとも北側の土坑の底からは、ほぼ完形の小形鉢形土器が2点出土している。他の出土遺物としては、ベッド状部分、土間状部分の床直から、それぞれほぼ完形の鉢形土器が2点ある。遺物は庄内式併行期のものと考えられる。

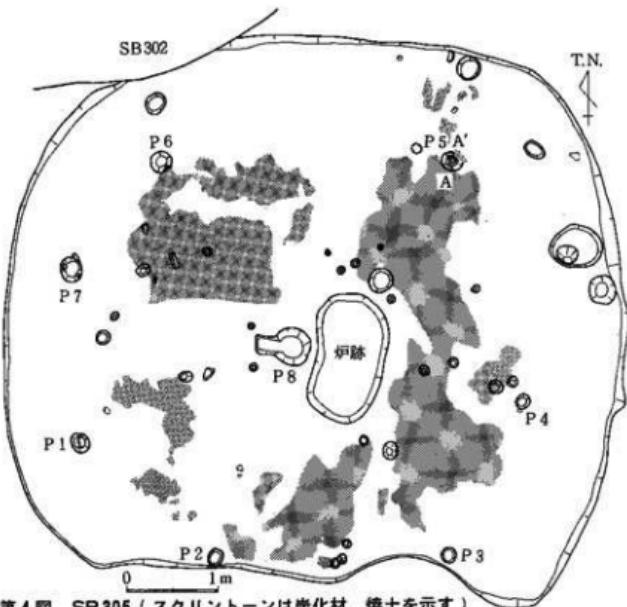
SB 305

SB 305は、北西をSB 302に切られた竪穴住居である。遺構確認面から床面までは、SB 304同様約5~10cmであり、南側の削平は特にひどいようである。形状は、削平前は径約6~7mの不整円形であったと思われる。床面は、ほぼ全体が焼土・炭化材に覆われておらず、焼失家屋の可能性がある。柱穴は、焼土・炭化材の下位より、中央の柱の抜きとり穴状ピット(P 8)を中心にして7穴が検出されている。なお、P 1からは根石が、P 5からは根石と柱根が出土している。柱根の根元は、コ字状にえぐられて形成されている。材質は、調査中である。炉跡は、中央部からやや東にずれた位置にあり、約5~10cmの厚さをもつ焼土・炭化物を含んでいる。出土遺物は少なく、いずれも土器小片ばかりであり、かろうじて炉跡から鉢形土器の口縁が出土しているのみである。遺物は庄内式併行期のものと考えられる。

SB 306

検出面より床面までの深さは約25cm。中央部やや東よりには2つの掘り方をもつ炉があり、最深部は床面より約30cmである。東部には焼土の塊が検出されたが構築された物ではない。南部外縁には

3つの張り出 第4図 SB 305 (スクリントーンは炭化材、焼土を示す)

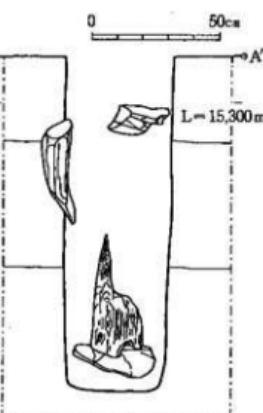


しがあるが、この住居跡を検出した当初にはこれら3つの部分は繋がっていた。所謂ベッド状遺構である。これらは床面より10cm前後高い。尚、北半分はベースが弥生時代前期の遺物包含層であって、土が非常に読みにくかったためか、北半分外縁にベッド状遺構が伴われていたかどうかは確認できず、断面観察でも確認できなかった。押立柱は7本であるが、このすべての柱穴には石が入っていた。床面からこれらの柱穴内の最も上の石までは20~60cmとまちまちであるが、根石であろう。うち1穴は床面に円形に配石されているが、これを詰め石と考えれば柱の直径は15cm程度か。また多くの石を詰めているのは同じ柱穴を使って建て替えでも行ったのであろうか。この竪穴住居は出土遺物から弥生時代後期後半のものであろう。

SB 307

1辺4m程の不整形の隅丸方形で、ベッド状遺構をもつ竪穴住居である。住居の主軸は真北より約11°東偏しており、床面四隅に柱穴を検出した。柱穴のそばにはそれぞれ深さ10~20cm程のビ

第5図 SB 305 P 5
柱根・根石断面図(東から)



ットを確認したが、この竪穴住居に伴うものかどうかは検討中である。床面中央部やや南寄りに炉跡を検出した。

出土遺物については、詳細な検討はまだであるが、南西隅の柱穴のそばのピットより鉢形土器が出土地している。

いわゆる庄内式併行期のものと考えられる。

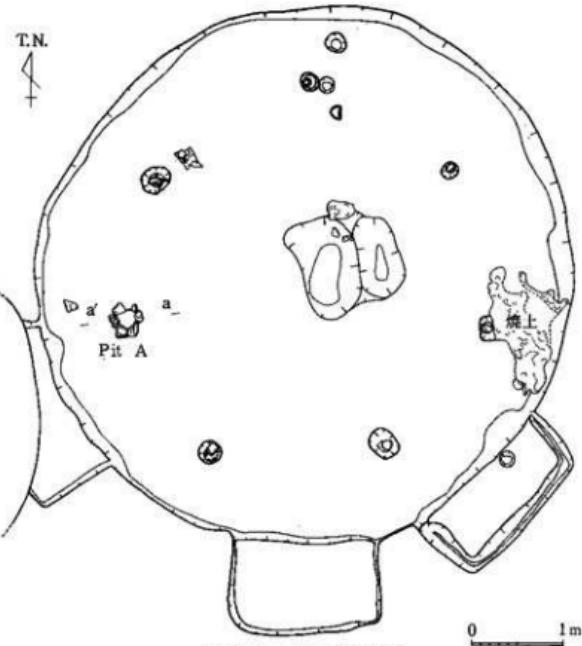
SB 308

SB 308は、一辺が5m強の円形に近い隅丸方形の竪穴住

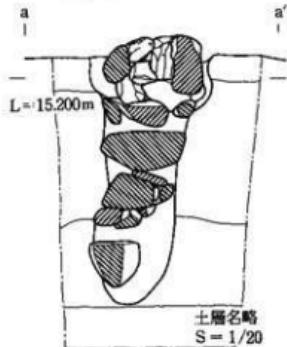
居であり壁溝をもつ。住居の主軸は真北から約14°東偏している。遺構の確認面から床面までは約30cmであり、中央部はSB 302と同様に約3cm前後土間状に深くなっている。ベッド状遺構を有していたものと考えられる。また、中央からやや南にずれた位置に炉跡状の遺構が検出され、土器片を多く含んでいたが、そこには炭化物は全く検出することができなかった。なお、その炉跡状遺構からは、小形鉢形土器と壺形土器が出土している。遺物の時期は庄内式併行期のものと考えられる。床面上に、多くの炭化材・焼土が検出されている。

SB 309

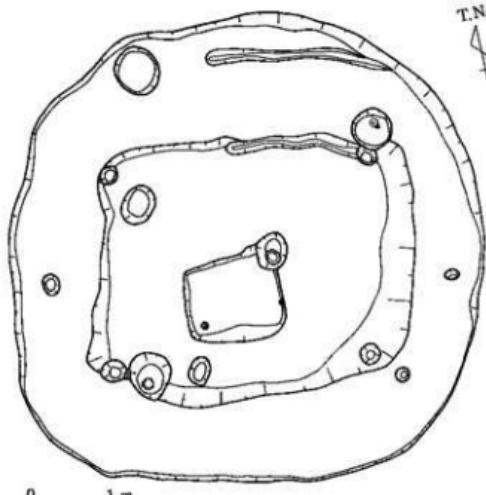
検出面より床面まで10cm弱。西・北・東には床面より数cm程高いだけのベッド状遺構を伴う。炉は中央よりやや東にあって南北に長く、掘り方は最深部で床面より10cm程深い。押立柱は4本であるが、このうち南西部の柱穴より上から小型壺、甕、甕、鉢が出土し、このうち甕、甕、鉢



第6図 SB 306 平面図



第7図 PitA 断面見通し図

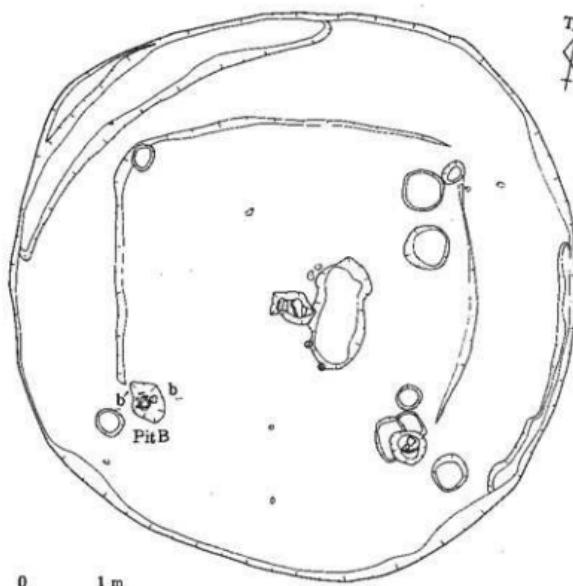


第8図 SB307 平面図

は重ねられた様な状態であった。出土遺物から判断して、この堅穴住居は弥生時代終末期のものであると言える。

SB 310

この住居跡は残存状況が比較的よく、検出面から床面までの深さは40cm余りある。周囲のベッド状構造は床面より5cm程高いだけである。またベッドの面より5cm程深い壁溝も伴っている。炉は中央よりやや北東部にあり、掘り方の最深部は床面より15cm程深い。尚中央部には黒色粘質土の薄層が広がっており、この中から石が3個検出された。この住居跡の北の壁でベッドの面より10~20cm高い位置にはほぼ完形の鉢が4個体、同じ様な状態で出土した。これらの土器を包含していた土は、断面の観察から、床面直上の土よ



第9図 SB309 平面図

りも先に堆積したことが判るだけだが、ここで生活が営まれていた時の遺品と考えてもよいのではなかろうか。やや離れて土製丸玉（直径3cm、厚さ2cmのソロバン玉の様な形）も同様な状況で出土した。この竪穴住居は出土遺物から弥生時代終末期のものと言える。

SB 311

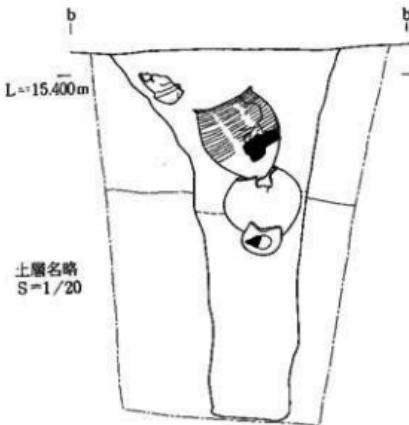
長辺方向3.6m、短辺方向3.1m程の隅丸（長）方形状の竪穴住居跡。検出面から床面まで約20cm。四周に深さ10cm弱の壁溝が巡る。中央に深さ20cm程の炉跡と思われるものがあり、それを切って換

む様に2つの柱穴がある。このプランは後述のSB 322に酷似する。ただこの住居跡が生活の場として機能していたものかどうかは今後種々の検討を要す。出土遺物は少ないもののやはり弥生時代終末期のものと思われる。

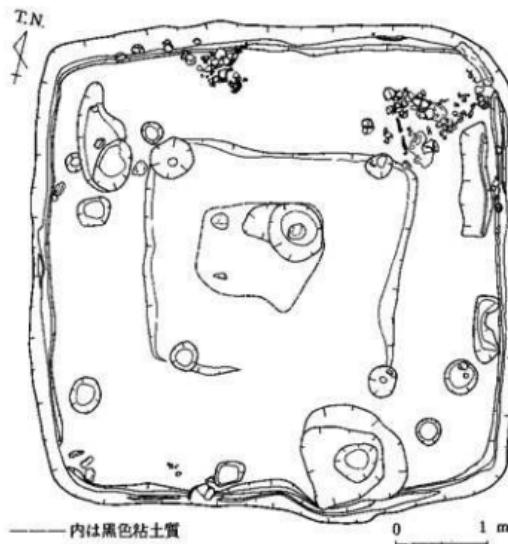
SB 313

南北・東西、共に7.4mを測る不整円形の竪穴住居である。確認された柱穴は5穴であるが、試掘トレンドによって1穴が失われた可能性が強く、6穴の柱穴を持つ竪穴住居であったと考えられる。床面中央部やや南寄りの部分に炉跡があり、内部に焼土層を確認した。また、床面南西部分に若干の焼土塊と炭化した木材が検出された。

出土遺物については、詳細な検討はまだであるが東端部の埋土中より完形に近



第10図 PitB 断面見通し図



第11図 SB 310 平面図

い鉢形土器が、炉跡より鉢形土器等が出土している。

いわゆる庄内式併行期のものと考えられる。

SB 314

SB 314は東西約3.5m、南北約2.5mを測る隅丸長方形の堅穴住居である。住居の主軸は真北から約4°西偏している。この住居は、同一平面プランで二回の建て替えがあったものと考えられる。

まず一度目は、遺構確認面から約30cmのところに床面をもち、ほぼ中央部に厚さ約5cmの焼土・炭化物を含む炉跡を伴うものであ



第12図 SB 314 平面図

南北約100cmの階段状もしくは祭壇状の高まりをもっている。この高まりは、地山と非常によく似た土であり、削り出し成形によるものと考えられる。なお、柱穴となりそうなピットは床面からは確認できなかった。出土遺物は、小形鉢形土器が1点と多数の土器片がある。この遺物の時期は庄内式併行期と考えられる。

その後、遺構確認面から約20cmに床面をもつ二度目の住居が掘られたと考えられる。壁溝と中央部西よりに炉跡をもつ。一度目の住居と同一平面プランをもつことから、一度目の住居が完全には埋まりきっていない時期に二度目の住居が掘りこまれた可能性がある。なお、二度目の住居に伴うと思われる時期判定可能な遺物は出土していない。

第12図は、一度目の住居のもので、P1はそれに伴い、P2はSB 402のものであり、SB 314の二回の住居をともに切っている。住居の平面プランは、SB 311, 322と極めて近い。

SB 315

SB 315は東西3m弱、南北2m強を測る隅丸長方形の堅穴住居である。住居の主軸は真北から約16°東偏している。遺構確認面から床面までは約20cmであり、壁溝をもつ。炉跡は、明確な掘り方をもたないが、床面中央部にゆるやかな80×60cmほどの落ちがあり、焼土・炭化物が堆積している。住居の平面プランは、SB 311, 314, 322より、やや小さいが酷似している。出土遺物は、鉢形土器が2点ある。遺物の時期は庄内式併行期のものと考えられる。

SB 318

東西3.8m、南北4.4mの方形の堅穴住居と思われる。北壁及び東壁、南壁に壁溝が認められた。

四隅に柱穴を有する住居と考えられるが、炉跡は確認できなかった。遺物は、支脚形土器3点、器台1点、小形器台3点、鉢形土器4点、皿形土器3点、壺形及び壺形土器片数点出土している。また、床面直上という遺物はほとんどなく、遺物の出土状況から所謂住居廃絶の際の祭祀が行われたのではないかと思われる。弥生時代後期末～庄内式併行期と考えられる。

SB 320, 321

SB 320は長辺方向5.5m、短辺方向5.0mの隅丸(長)方形形状の竪穴住居跡。検出面より床面までの深さ約35cm。北・東・南には床面より10数cmの段差をもつベッド状遺構が検出されたが、その平面型は四辺形を成さず特異である。中央よりやや東にある炉跡は掘り方の深さ約15cmで炭化物をびっしり詰める。押立柱はベッド裾の4穴によるものであるが、そのうちの南東の柱穴からは柱根が検出された。出土遺物は整理途中ではあるが、埋土からのを含めてみてみると、鉢等小型の土器類(小型丸底壺あるいは小型丸底鉢)また粗造で壺や皿と呼べそうなもの)が目立ち、頭部に穿孔があり極めて短い口縁をもつ無頸壺と思われるものも出土しており興味深い。出土遺物から判断してこの竪穴住居は弥生時代終末期のものであり、その遺物は円形に近いプランをもつ住居跡のそれらより新しいものと思われ、SB 310出土の遺物の時期や遺構のプランとの共通性が認められる様だ。

尚、この住居跡に切られているSB 321もほぼ同規模、同時期の竪穴住居と思われる。出土遺物の中には、直径2.5cm、厚さ1.7cm程の土製丸玉がある。

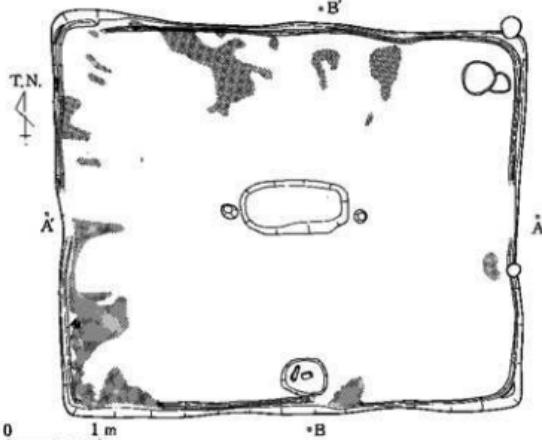
SB 322

検出面より床面までの深さ約20cm。中央の炉跡らしいものは床面より約10cmの深さ。しかしその壁面は一部だが確実に焼土化している。四隅に深さ僅か数cmの壁溝が住居跡の壁面を抉って巡る。埋土の断面観察では、壁溝と炉と思われる部分を除いては埋土は一層である。床面より5cm程上で直径6mm、長さ20mmの碧玉製の管玉が出土した。土器の出土量は極めて少ないが、それら

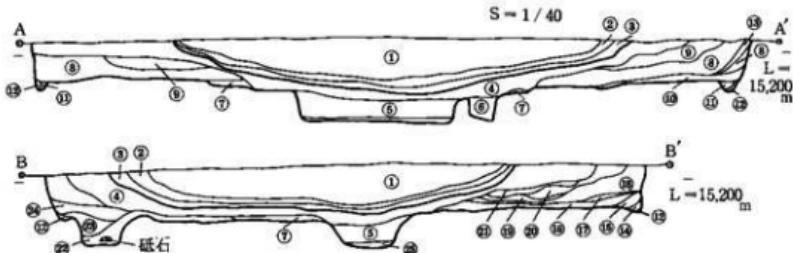
から判断してこの竪穴住居は弥生時代終末期のものであろう。この住居跡より出土した遺物はSB 311と同時期のものと思われ、円形に近いプランをもつSB 309やSB 313から出土した遺物とも同時期と思われる。やや規模の大きい円形に近いプランをもつ竪穴住居の間に、小さな隅丸(長)方形状で2本の柱をもつ竪穴住居が建っていた時期を想像できないであろうか。

SB 323

SB 323は東西約5m、南北約4mを測る隅丸長方形の竪穴住居である。住居の主軸は真北から約1°東偏



第16図 SB323 平面図



- | | |
|-----------------------|------------------------|
| ① 暗黒褐色粘質土層 | ⑫ 明黄褐色粘質土層 |
| ② 明黒色粘質土層 | ⑬ 暗褐色粘質土層(燒土・炭化物を含む) |
| ③ 暗黒色粘質土層 | ⑭ 暗褐色粘質土層 |
| ④ 淡黒灰色粘質土層(褐色が入る) | ⑮ 燃土・炭化物の塊 |
| ⑤ 淡黒灰色粘質土層(燒土・炭化物を含む) | ⑯ 明灰褐色粘質土層(茶黒色の粒子を含む) |
| ⑥ 淡黒灰色粘質土層(燒土・炭化物を含む) | ⑰ 暗灰褐色粘質土層(燒土を含む) |
| ⑦ 暗白褐色粘質土層 | ⑱ 暗灰褐色粘質土層(茶黒色の粒子を含む) |
| ⑧ 明黃褐色粘質土層(茶色粒子を少し含む) | ⑲ 明灰褐色粘質土層 |
| ⑨ 暗黃褐色粘質土層 | ⑳ 暗黒褐色粘質土層(燒土・炭化物を含む) |
| ⑩ 暗黒褐色粘質土層(燒土・炭化物を含む) | ㉑ 暗褐色粘質土層(燒土・炭化物を含む) |
| ⑪ 暗黃褐色粘質土層(茶色粒子を少し含む) | ㉒ 淡褐色粘質土層(黄色粘質ブロックを含む) |
| ⑫ 暗黒褐色粘質土層(燒土・炭化物を含む) | ㉓ 炭層 |

第17図 SB323 断面図

している。この住居は第17図からわかるように、遺構確認面において住居址プランの内側に暗黒褐色粘質土層の約3m四方のプランを検出した。

まずSB 323は、遺構確認面から床面まで約30cmであり壁溝をもつ。炉跡は、床面のほぼ中央に存し、約20cmの厚さをもつ焼土・炭化物をおさめている。また炉跡の東西にある径10~15cmの二つのピットが柱穴と考えられる。このように炉跡の東西に二穴の柱穴をもつ住居は、SB311, 322と同様である。また、下川津遺跡のSBNa 06も類似した例と思われる。このSB 323は、焼土・炭化材が床面中央部ではなく、東西南北のそれぞれの壁にはりつく形でのみ残っていたことから、焼失家屋であった本住居が、ある程度埋まった時期に、先述の約3m四方のプランをもつ遺構が中央部を削平して、床面中央部の焼土・炭化材をとりさったものと考えられる。SB323に伴う出土物は非常に少なく、小形鉢形土器を1点と南壁沿い中央のピット内からの磁石2点のみであった。遺物の時期は現在検討中である。

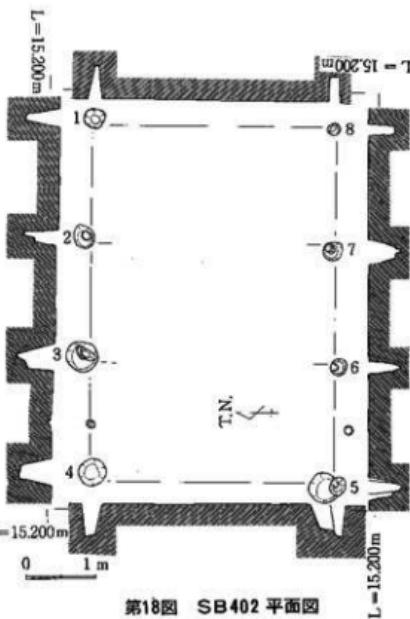
SB 323を切る3m四方のプランをもつ遺構は、最深部で遺構確認面から約40cmを測るが第17図の②、③層のヘドロ状の黒色粘質土層中より大量の土器を検出した。少なくとも高壙18点、變形土器5点、磁石1点が出土している。高壙の出土量が非常に群を抜く本遺構が、どのような性格をもつものであるかは、今後検討を要する問題である。遺物の時期は布留式併行期であり、SB 323の遺物の時期とは、若干の差が考えられる。

SB 401

SB 401は、SB 314の北側で検出した1間×2間の建物である。長軸の方向は、N-41°-E、長辺2.9m、短辺2.7mを測る。各柱穴は、径20cm前後、遺構確認面からの深さは10~20cmである。なお二穴より土器片が少量出土している。

SB 402

SB 402は、SB 314を囲むように検出した1間×3間の建物である。長軸方向は、N-90°-E、長辺5.1m、短辺3.5mを測る。各柱穴は、径20~40cm、遺構確認面からの深さは40~60cmで非常にしっかりとしたものである。建物の南側の柱穴5, 6, 7, 8からは埋土中位(L=15.200m前後)から10cm大の石が出土しており、詰石の可能性もある。7の柱穴はSB 314を切っている。また全柱穴から土器片を少しずつ出土している。この建物が、SB 404とほぼ同一方位を向き、SD 301と平行していることが注目される。



第18図 SB 402 平面図

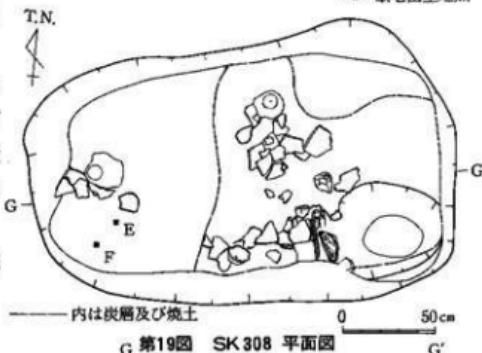
SB 403

SB 403は、SB 314の西側で検出した1間×2間の建物である。長軸の方向は、N-29°-E、長辺3.5m、短辺3.0mを測る。各柱穴は径30cm前後、遺構確認面からの深さは20~30cmであり、東側の三つの柱穴からは、埋土上位(L=15.200m前後)から10cm大の石が出土している。また、全柱穴から土器片を少量ずつ出土している。

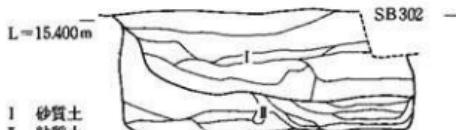
SB 404

SB 404は、SB 402同様SD 301にほぼ平行している1間×2間の建物である。長軸の方向は、N-81°-E、長辺4.2m、短辺2.2mを測る。各柱穴のあり方は、北側の三穴と南側の三穴とでは微妙に異なる。径は、ともに30cm前後であるが、遺構確認面からの深さは、北側の三穴が50cm前後、南側の三穴が20cm前後というように北側の三穴が深くなっている。ただし、その北側の三穴には10~20cm大の石が数個ずつ各柱穴内にしっかりと埋めこまれたかたちで認められ、その石のレベルが、南側の三穴の底とはほぼ同じレベルとなっている。また、全柱穴から土器片を少量ずつ出土している。

- E 獣歯出土地点
- F 獣毛出土地点



G 第19図 SK 308 平面図



第20図 SK 308 断面図

SK 308

南北1.4m、東西2m、確認面からの深さ約1mを測る不整長方形の土坑である。長軸は真北より約85°東偏し、東端から約70cm程はSB 302によって深さ30cm程度切られている。

確認面から深さ60cmまでは砂質土層が堆積し、その下には粘質土層が堆積している。上位の砂質土層中には弥生時代前期の遺物が多く含まれるが細片が多く、一種の廐棄坑と考えられる。下位の粘質土層部分は東端部分に径40cm、深さ20cmの落ち込みが見られ、焼土と炭化物がラミナ状に堆積している。また、その周囲と肩にも焼土が見られることから火の使用が推測できる。また西端部分で獣毛・獣歯、東側の填土層からは多量の魚骨が出土しており、煮炊に利用していた可能性も考えられる。

上位・下位とも出土遺物から判断する限り弥生時代前期のものと考えられる。

SK 320

SK 320は、SB 304の北側で検出された土坑である。東側をSD 302に切られ、北側を擾乱坑によって破壊されている。土坑の埋土は一層で、暗茶黒色粘質土層と炭化物を多く含む土に10~20cmの大の礫と土器片を多く検出した。出土した遺物は、壺形土器・壺形土器あわせて、少なくとも8個体以上を数えている。遺物の時期は、弥生時代前期のものと考えられる。

SK 321

SK 321は、SB 304の西側で検出された土坑で、東西に1.3m、南北に1.2mの歪な形を呈する。遺構確認面からの深さは約40cm、埋土は炭化物を多量に含む暗茶黒色砂質土一層であり、とり上げ可能なサヌカイトのチップ数だけで262片にのぼり、小土器片63にくらべて非常に多いことがわかる。また、サヌカイト製の石鏃3点、石錐片1点も出土している。この土坑が石器加工とどのようなかかわりをもつものであるかは、今後検討を要する問題である。遺物の時期は、弥生時代前期のものと考えられる。

SK 338

長径2.3m、短径1.5m、深さ30~40cmを測る楕円形の土坑である。長軸は真南北より約45°東偏している。

最下層の灰色粘土中に土器が集中しており、北西部より磨製石斧1点が出土している。また、最下層北部にはSK 308と同じく多量の魚骨・獸骨が出土している。

出土遺物から判断する限り弥生時代前期のものと考えられる。

SK 308並びにSK 338出土の魚骨に関して言えば、①歯に犬齒と臼齒がある。②椎骨のサイズに差がある(①と②には同一種であることが前提となる)。③鱗の棘が大きくしっかりしていることなどよりスズキ目の魚類であると推測される。

尚、SK 308、SK 338出土の魚骨・獸骨については、来年度に正式な鑑定を依頼する予定なのでその結果を待ちたい。

SX 313

北東から南西方向約13m、それに直交する方向約3m、この方向の断面はU字で深さ約60cm。溝状遺構とも言えないし土坑とも言えそうにない不明遺構である。



第21図 SK 338 平面図

遺物は南半部の上から2層目に集中して出土した。細片になってはいたものの形をなして出土するものが多く、接合可能なものがかなりある。まだ整理途中ではあるが、壺、甕、鉢、高环が確認されている。これらのうち壺には口縁端部を平たく成形して凹線を2条施しているものがあり、鉢にも同様の手法が用いられていて、口縁端部の平坦面をかなり内側に突出させているものがある。また高环には、口縁部を内彎させたものから、外反ぎみの口縁をもち端部を丸く仕上げ、脚端部に凹線を2条施してあるものまである。これらの遺物は紫雲出山遺跡、末則古墳北端ピットや葛谷遺跡等の出土遺物と類似している。従って出土遺物の時期は弥生時代中期末から同後期前半頃と思われる。

これらの遺物は、厚さ20cm程の同一層から混在集中して出土したことから、古い土器を継続して使用しながら新しい上器を取り入れ使用していた生活があったことが考えられるのではないかだろうか。従ってこの遺構は出土遺物の下限をとって弥生時代後期前半頃の所産と考えられる。尚この調査区内では、この時期に最も近い時期の遺物を出土した遺構は他にSK 304があるのみである。

4.まとめ

本報告のおわりに、遺跡の特徴から今後の整理の方向付けについて若干触れておきたい。

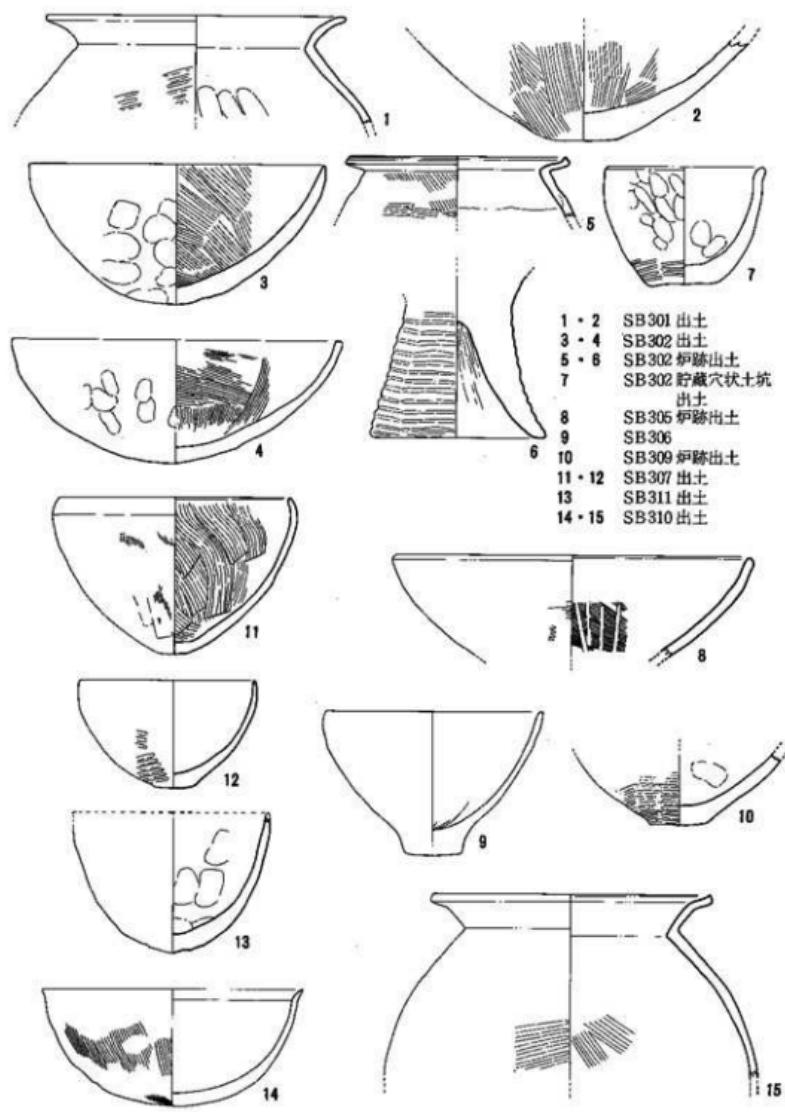
まず第一は、弥生時代終末期と考えられる堅穴住居跡に数種の形態と方向性が認められることである。これらについては、終末期と呼ぶ短期間内のさらに短い時間差であるのか、あるいは上部構造のあり方を含めた用途の差、さらには、異なる地域の様相の反映などと理解することができよう。とりわけ、SB 311, 322, 323の形態は板出市下川津遺跡検出のSBNa 06と酷似する点は注目される。

したがって、これから整理では、住居跡のグルーピングが重要な課題となると考えている。

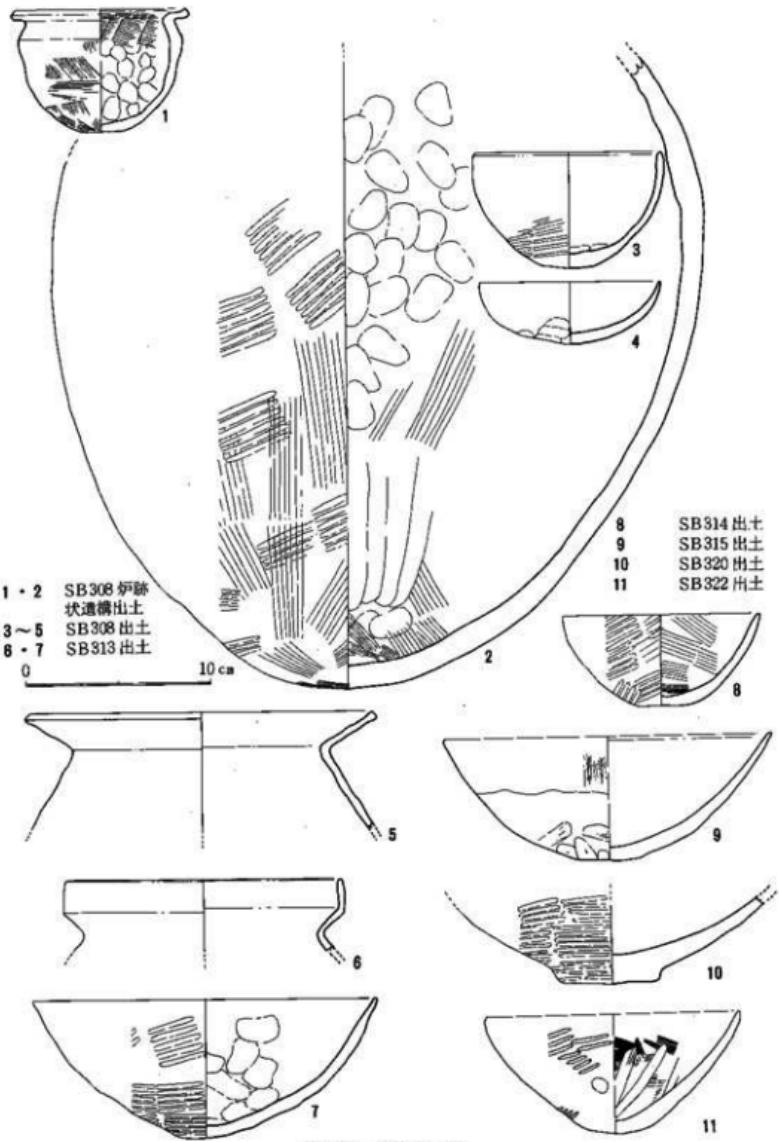
第二は、弥生時代前期に比べると、終末期の資料の中に生業に関連する遺物が少ない点である。本遺跡からは、前期のものと考えられる石庖丁、磨製石斧、石鎌、石錐、石鍬などが出土しているものの、終末期と考えられるものはほとんど確認していない。なかでも、石庖丁に代表される農耕具類が認められないことが、水田遺構を検出しなかったこととあいまって、生産活動を不可解なものとし、遺跡が沖積平野に立地する要因をも難解なものとしている。

また、この時期に普通寺平野の遺跡では普遍的に出土する金属器が認められなかった点も、上記の点と共に本遺跡の生産力を評価する上で留意すべき問題と言えよう。しかもこの事実については、この時期の直後に出現する前期古墳の营造力の解釈にも大きい意味をもつと考えられるため、整理の核としていくつもある。

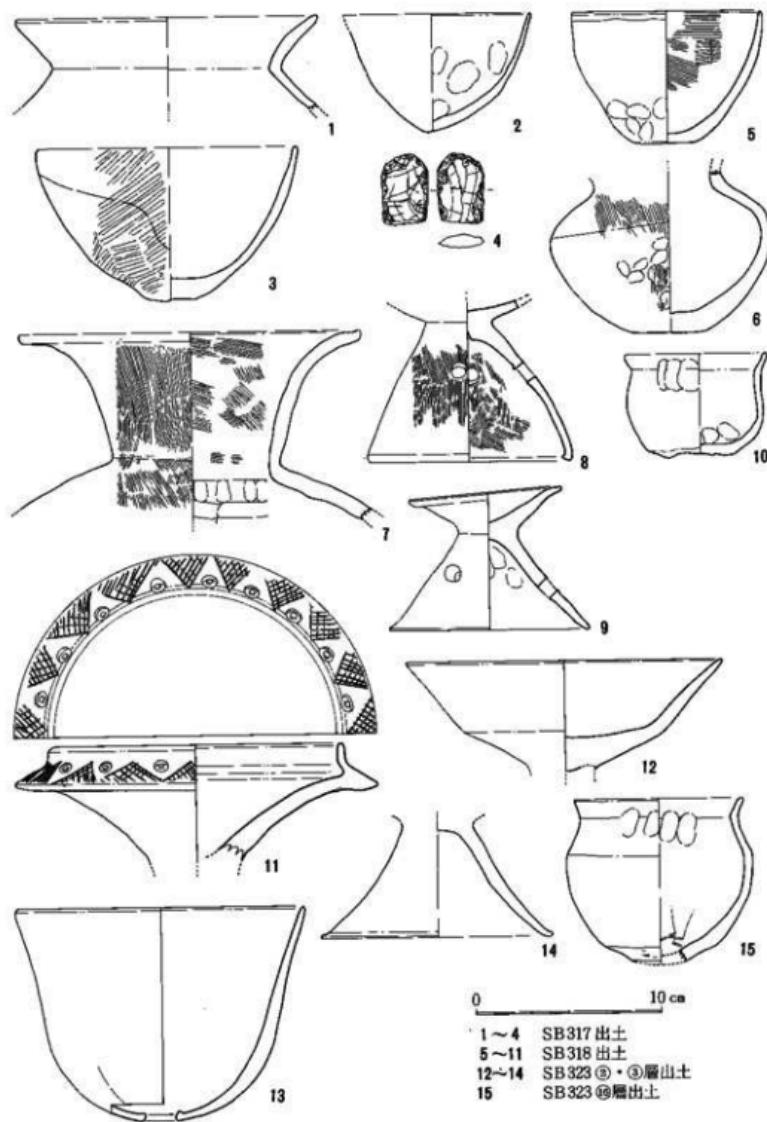
以上を調査終了時点における整理課題とし、まとめてかえる。



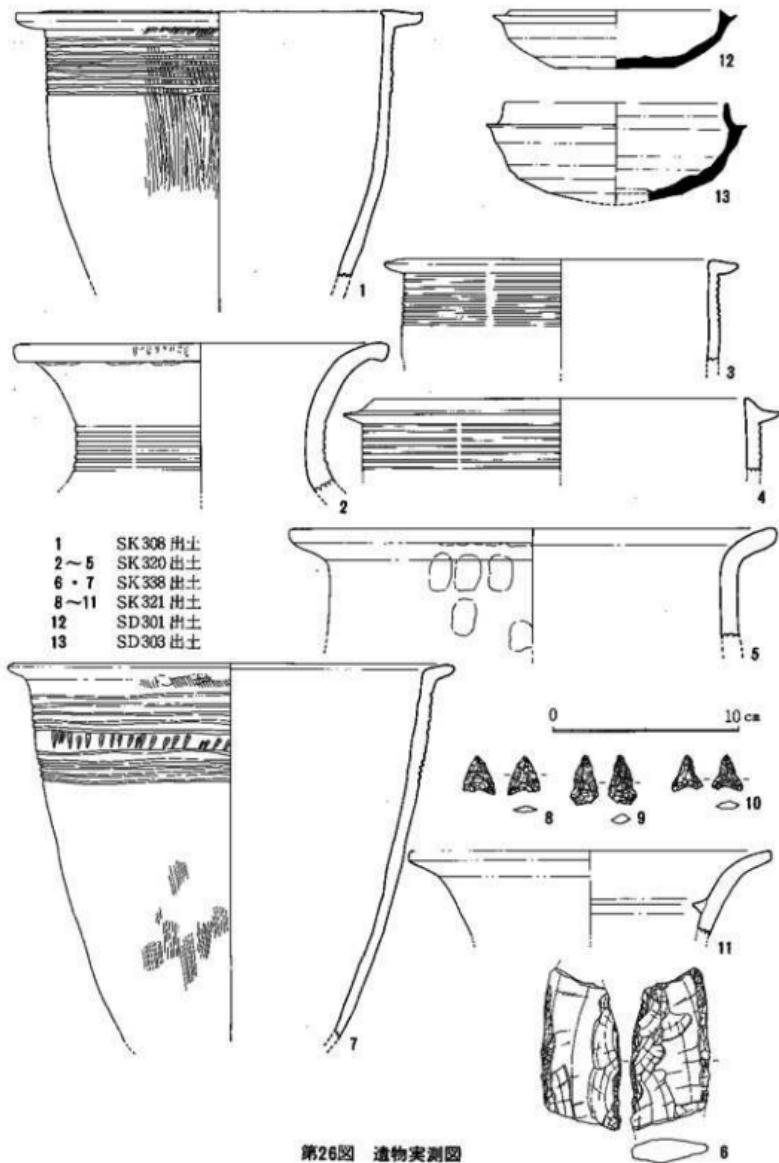
第23図 遺物実測図



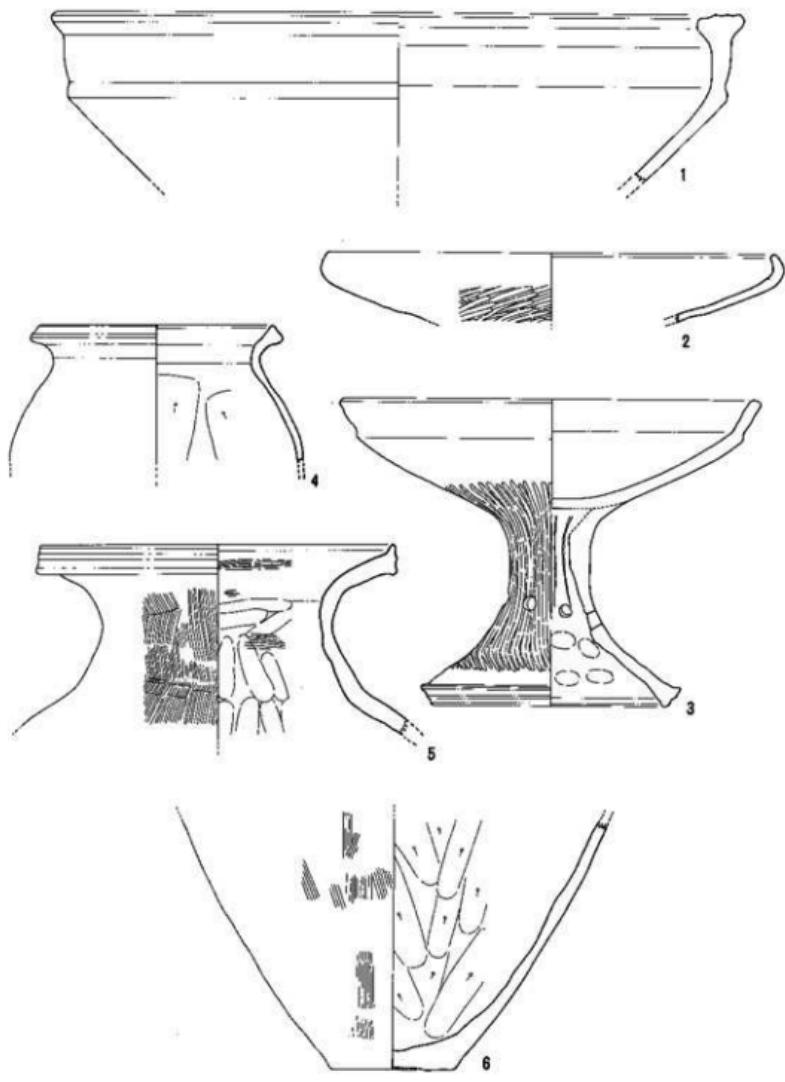
第24図 遺物実測図



第25図 遺物実測図



第26図 遺物実測図



0 10cm

第27図 SX 313出土遺物実測図

長砂古遺跡

1. 立地と環境

長砂古遺跡は、三豊平野のほぼ中央に独立丘陵を形成している母神山(92.1m)の裾部を北西方向に延びる丘陵状の微かな洪積台地の縁辺部に位置している。その標高は現地形で概ね22~25mを測り、鎮守池西畔をピークとして、北東、南西両方向に緩やかに傾斜する様相を呈している。なお、行政的区分では觀音寺市池之尻町大長に該当する地域である。

当該地域は、北方に西讃地方有数の広大かつ肥沃な沖積平野である三豊平野を一望することができ、更に北方には七宝山の山並みを、西方には燧灘を見渡すことができる。一方、南方には眼前に母神山が佇立しており、その遠方には菩提山(312m)をはじめとする、阿讚山脈に連なる峰々を一望することができる。

周辺地域には弥生時代以前の遺跡の存在は殆んど知られておらず、古川遺跡(銅鐸出土地)が挙げられるのみである。しかし、四国横断自動車道建設に伴う一の谷遺跡群の発見など、徐々にではあるが、往時の姿が解明されつつある。

古墳時代以降の遺跡としては母神山古墳群が著名である。母神山古墳群は総数70余基からなる三豊平野最大規模の群集墳で、肥沃な三豊平野の生産力を背景として集落を営んだ共同体の墓域として6~7世紀にかけて盛行した。

長砂古遺跡でも、その立地から母神山を墓域とする集落、あるいは墳墓の存在が期待された。

2. 調査の概要

長砂古遺跡の存在は昭和60年9月19日より9月26日にかけて実施された試掘調査によって知ら



第1図 長砂古遺跡地区割図

れるに至った。発掘調査はその結果を受けるかたちで、昭和61年1月13日より同年9月9日にわたって実施された。調査対象面積は8,900 m²である。

調査区は北から南に3つの大調査区(Ⅰ～Ⅲ区)に分けられ、各調査区は更に1辺20mの小調査区に小分割されており、南北にアルファベット、東西にアラビア数字をつけ、各々の小調査区の記号とした。なお、各調査区の主軸は真北より振り出している(第1図)。

発掘調査の進行に伴い、建物遺構、溝状遺構等が徐々に検出されてきたが、調査が進むにつれて、製瓦用粘土の採取等による近現代の搅乱、削平が広範囲にわたることが知られる様になった。特にⅡ、Ⅲ区においてはその傾向が著しく、遺構の遺存状況は極めて悪いものであった。

3. 遺構について

長砂古跡は、先に述べた様に近現代の搅乱、削平が広範囲にわたっており、遺構は全体的に希薄であったが、各調査区において概ね以下に示す様な遺構が検出された。

I区(第5図)

全調査区を通して比較的遺構の遺存状態が良く、多数の建物遺構、溝状遺構等が検出した。建物遺構は全部で6棟検出されたが、その大半が掘立柱建物址であり、堅穴住居址は1棟のみであった。

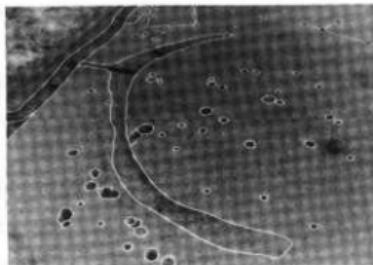
SB 8601(第3図)

E・F-11・12で検出された堅穴住居址で、削平を受けていたため、柱穴のみ確認された。ほぼ中央に主柱穴1個を持ち、その周囲に8穴の柱穴が認められる。北半を周縁する溝(SD 8601)を含め、周辺より多量のサヌカイト片(製品を含む)の出土を見ており、時期は弥生時代前期から後期にわたるものと考えられる。

溝状遺構は13条が検出されたが、その殆んどは流路を北西方向にとっている。



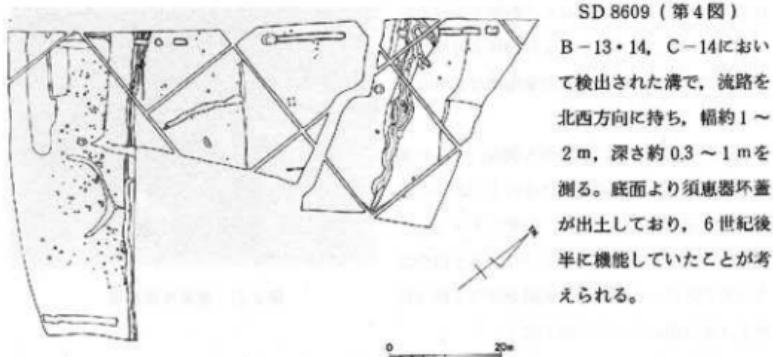
第2図 発掘作業風景



第3図 SB 8601・SD 8601



第4図 SD 8609



第5図 I区遺構配置図

II区

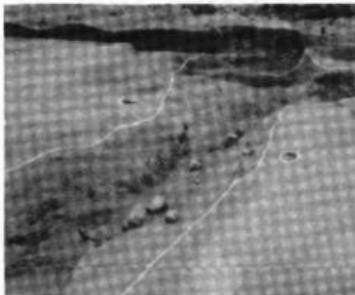
J-7・8, K-8の部分で段になっており、以北は特に削平が著しく、遺構の遺存状態は悪いものであった。検出された遺構としては、10数条の溝状遺構と若干の土坑等が挙げられる。

溝状遺構はその殆んどが小規模で、その流路も方向に統一性は見られない。

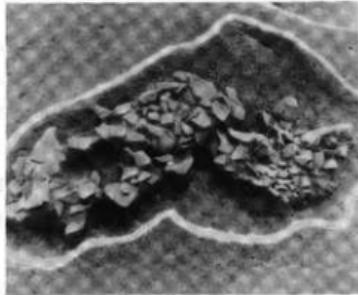
SD 8616 (第6図)

J-9・10において検出されたが、北東及び南は調査対象地外となるため、15m程度しか発掘できなかった。流路を北から北東方向に持ち、その規模は幅約3~6m、深さ約1.5~4mを測る。弥生土器(後期)、瓦質土器が出土しており、2時期に機能していたことが考えられる。

その他目立った遺構としてはSK8605(第7図)が挙げられる程度である。1.4m×0.8m程度の不整格円形をしており、断面はごく浅い皿状を呈している。須恵器片、土師器片を比較的多く含んでおり、時期的には古代末から中世のものと考えられる。



第6図 SD 8616



第7図 SK 8605

III区

全調査区を通じて最も削平の程度が甚しく、遺構の遺存状態は極めて悪いものであり、旧来柿畠であった地点に削平によって封土を失い、下半のみが遺存した横穴式石室が1基認められた程度である。

横穴式石室(第8~12図)

R・S-2・3において、弥生時代後期の遺構を取り巻く形で検出された。

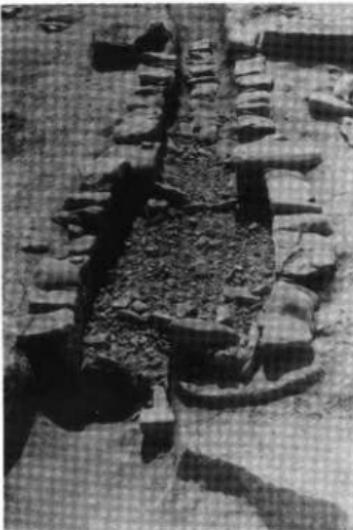
石室は、ほぼ東西に主軸を持つ(S-82°W)両袖式の横穴式石室で西に開口している。石室規模は、玄室長2.6m、奥壁幅1.7m、玄門側幅1.65m、最大幅1.88mを測り、若干の胸張り傾向を呈している。羨道は長さ約3m、幅約1mを測り、持ち送り気味に構築されており、羨道の先には更に長さ約6m、幅約0.9~1.2mの墓道が続いている。

石室は、地山にその規模約6.5m×3mの墓壙を穿つことにより構築がなされており、奥壁側には側壁、奥壁を据えるために「コ」の字形に幅30cm程度の溝が掘られている。

石室基底石には比較的長大な石材が使われており、玄門部分と側壁最奥部、奥壁には大形ではあるが偏平な石材が使われている。石室内部は基底石が据えられた後に淡暗茶褐色土が厚さ約5cm程度、全面にわたって敷かれており、その面から排水溝が掘りこまれている。

排水溝は断面「U」字形で、奥壁から墓道にかけて、中央に真っすぐ穿たれており、その規模は長さ約7.5m、幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。なお、排水溝には偏平な石材が全面にわたって蓋石として被せられている。

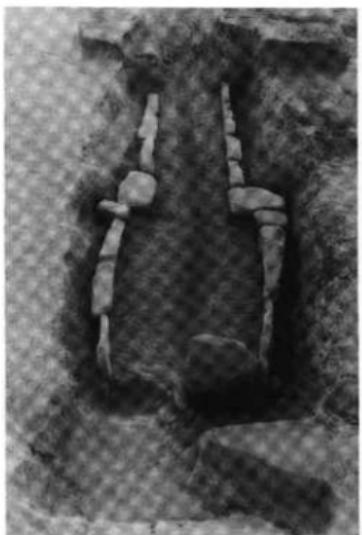
側壁は最奥部を除いて玄室・羨道とも小口積みされた河原石で構築されており、そのつくりは比較



第8図 石室礎床(上層)



第9図 石室礎床(下層)



第10図 石室基底石



第11図 石室掘り方

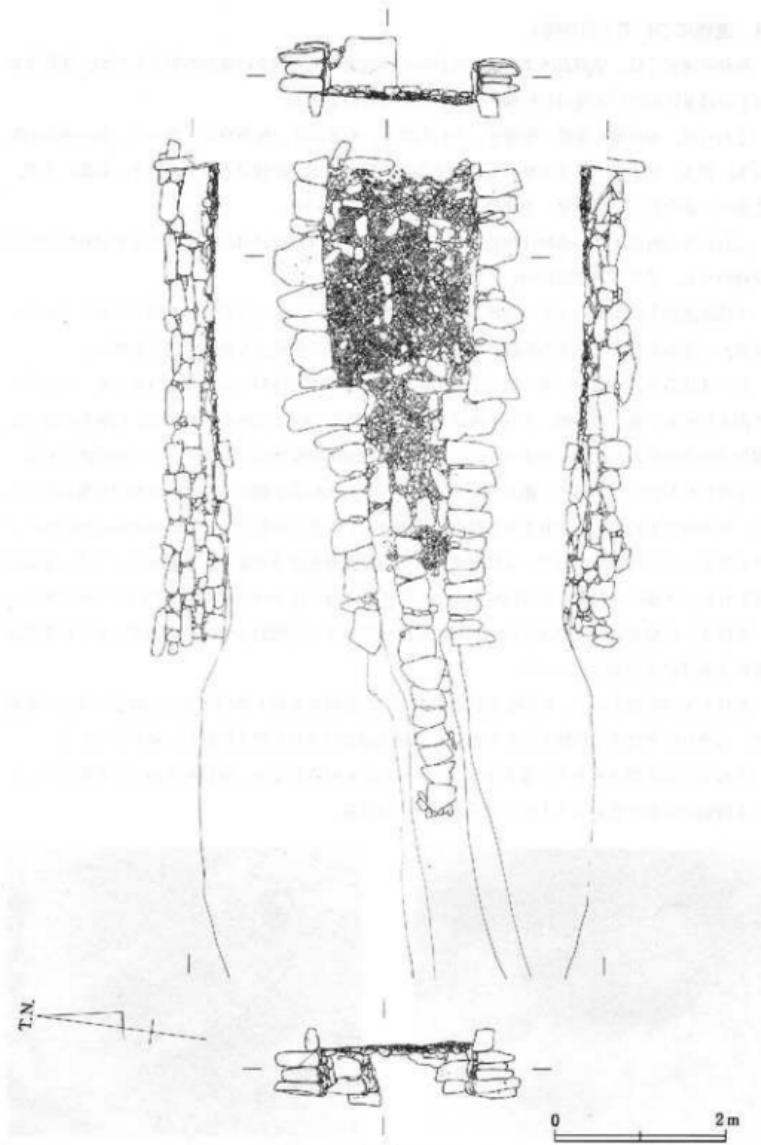
的堅牢である。

床面は母神山古墳群特有の二重構造の礫床になっている。上層は比較的小さめの礫(4~10cm程度、玉砂利)を使用しており、白褐色粘土を礫間に充填することによって礫床を形成している。下層は上層に比べ大きめの礫(10~20cm程度)が使われており、上層同様粘土が充填されているが、排水溝を挟んで礫の敷き方に差が認められる。すなわち、東半部は礫がランダムに敷かれているが、西半部は部分的にではあるが礫が長軸を石室主軸とほぼ平行に、比較的規則的に敷かれており、埋葬に関して何らかの意図が働いたことが考えられる。なお、上層には敷石とは別に、長さ30cm程度の大きめの石材が矩形に並べられており、棺台としての役割を果たしたものである可能性がある。

玄門には幅50cm、高さ30cm程度の仕切り石が据えられており、羨道部側には閉塞石の一部と考えられる石積みが認められた。

最後に、埴丘についてであるが、先に述べた様に封土を削平によって完全に失っており、復原は困難であるが、概ね直徑12~14m程度の円墳と考えられる。

なお、石室の北西、南西2ヶ所に須恵器が集中して出土した地点があり、その性格については今後の課題としたい。



第12図 横穴式石室実測図

L = 22.50 m

0 2m

4. 遺物について(第15図)

長砂古跡では、全調査区より弥生時代から中近世に至る種々の遺物が出土したが、注目されるものはⅢ区において検出した横穴式石室に伴う資料である。

それらは、須恵器(提瓶、短頸壺、台付長頸壺、有蓋高坏、無蓋高坏、器台)、装身具(銀環、勾玉、菅玉、切子玉、ガラス製丸玉、同小玉、土製丸玉)、鉄製品(直刀、刀子、鐵鏃、雲珠、辻金具、革金具)、鍛錬車、土師器、等多岐にわたっている。

これらを含め出土した遺物は現在全て整理中であり、詳細は後日に委ね、ここでは先に示した資料のうち、若干の須恵器についてのみ紹介しておきたい。

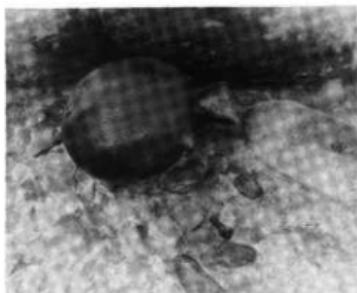
1は羨道埋土中より出土した高坏蓋であり、外面上部に「十」字形のヘラ記号を有している。なお、つまみを持たないその形状は坏蓋と酷似しており、判別は今後の課題としたい。

2~4は石室北西において一括して出土した須恵器群中の資料である。2は3とセットをなして出土した高坏蓋であるが、セット関係をなす可能性については検討を要する。形態的には1と異なり中央が凹んだ偏平なつまみを有しており、内面中央には同心円スタンプ文が観察される。3は蓋坏を転化した坏部に、緩やかに外方に広がる形状を示す脚部を有する形態の有蓋高坏である。坏部はやや内傾する立ち上りを持ち、端部は丸く仕上げられている。脚部は長方形2段のスカシ窓を3方向に有している。4は基部が太く短い脚部を伴う有蓋高坏であるが、スカシ窓は存在しない。坏部の立ち上りは3同様内傾しているが、丸く仕上げられた端部は直立気味である。

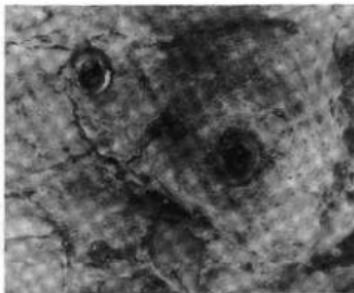
5は1と同様羨道埋土中より出土した無蓋高坏である。比較的小型で、坏部外面下半に籠描きによる波状文が施されている。

6は石室床面直上から、転倒した状態で出土した提瓶である(第13図)。口縁部は比較的肥厚で、わずかに外反する形状を示しており、体部上面に付された把手は鉤状に退化している。

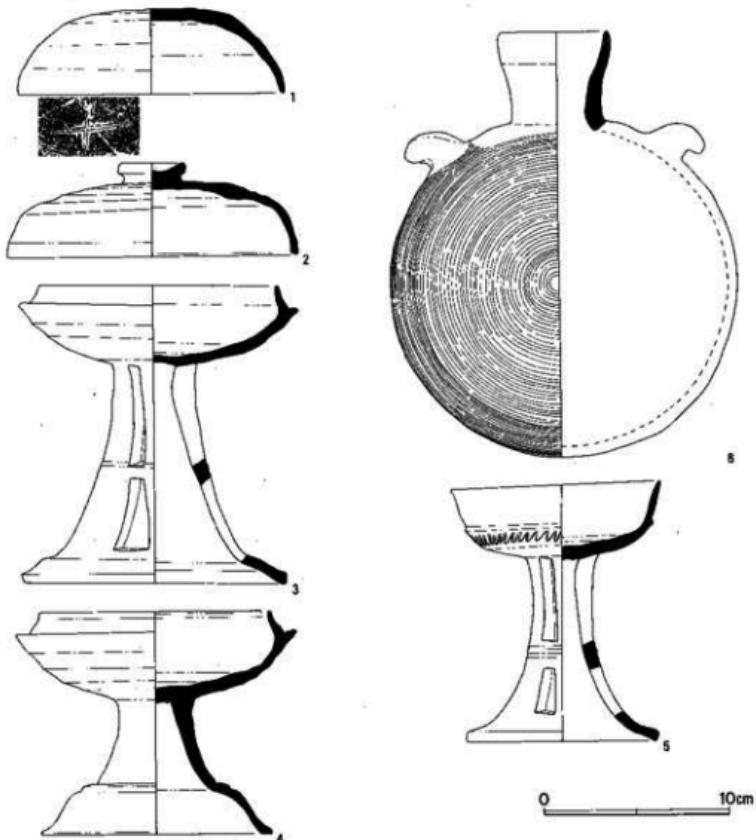
これらの須恵器は若干古い要素を残しているものも見られるが、概ね陶邑編年のⅡ形式3ないし4段階の範疇で把えることができるものと思われる。



第13図 提瓶・土製丸玉出土状況



第14図 銀環出土状況



第15図 Ⅲ区出土須恵器実測図

5.まとめにかえて

今回実施した長砂古墳跡の発掘調査では、先に繰り返し述べてきた様に近現代にわたる広範囲の搅乱、削平のため、大半は遺構を確認し得なかった。

しかし、I区においては弥生時代（前・後期）、古墳時代（後期）の生活址を確認することができ、Ⅲ区においては6世紀後半の所産と考えられる横穴式石室1基を検出することができた。

こうして確認された遺構・遺物は、肥沃な沖積平野である三豊平野の生産力を背景として成立し得た集団の生活址を解明する有効な一資料となるであろう。

柞田八丁遺跡

1. 調査の概要

柞田八丁遺跡は、三豊平野の南西部、観音寺市柞田町八丁の土井之池北側に位置する。当遺跡から南方を望めば、讃岐山脈が東西に連なり、その中の雲辺寺山麓に源を発する柞田川が当遺跡の北方を流れて扇状地形を形成しており、当遺跡はその扇端部に立地している。東方にはかつて70余基の古墳が密集していたと伝えられており、その後の開墾により消滅したものも多いと言われている。また、県内でも有数の群集墳である母神山（最高92m）をも一望できる地にある。北方を望めば、人口約4万の観音寺市街が広がり、さらに北方には七宝山塊の山々が連なり、西方には燧灘が広がっている。

調査区付近には、奈良時代以降都と地方を結ぶ交通路であった南海道の柞田駅址が当遺跡の東南部に存在したであろうと推定されている。また、政府の鎮護国家の思想により各國に造られた国分寺・国分尼寺建立以前のものである安井廃寺も当調査区から東へ約500mほどの所に存在するなど、奈良期の遺跡が存在している。また一昨年には付近の水田から奈良時代のものと推定される陶印（須恵質、「封印」と刻字）が出土していることなどから、当調査区でも以上の事柄に関連した古代の遺構・遺物が検出される可能性が推定された。

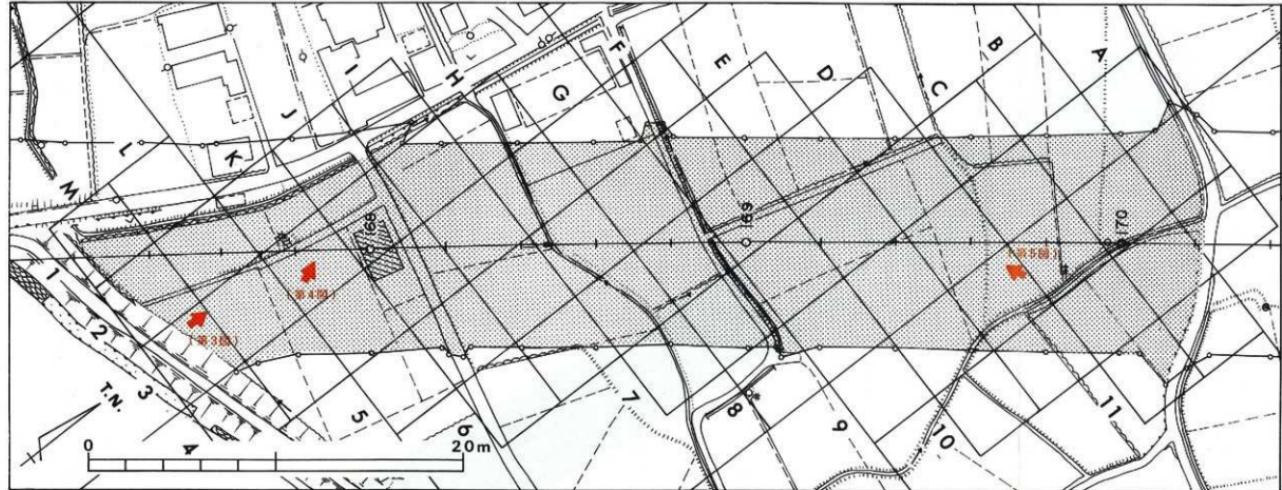
次に当調査区は地区割図を参照していただきたいが、まずⅤ区では耕作土から土層の基盤である地山までの間に多くの層が形成されていた。しかしⅣ区とⅤ区の境あたりで、Ⅳ区の方がⅤ区に比べ水田面が約1m程高くなっている。そのⅣ区・Ⅲ区・Ⅱ区そしてⅠ区の北半分までは水田面が同じ高さになっており、耕作土直下では地山が検出された。しかし、Ⅰ区の南半分から土井之池の堤までは、耕作土から地山までの間にⅣ区と同様多くの層が形成されていることから、旧地形はⅣ区からⅢ区・Ⅱ区・Ⅰ区の北半分に移るにつれてゆるやかにではあるが高くなっていく地形で、耕作土から地山までの間には多くの層を形成していたであろうと推測される。

以上のこと反映してか、Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区

第1図 発掘作業風景

（南半分）は、近・現代の圃場整備または製瓦用の粘土採集等によりかなり削平を受けており、広い範囲にわたって擾乱層が存在しており、遺構を検出しても、その遺構のプランをかすかに確認できる程度で、すぐ底が出てしまったもの、あるいは消滅したであろう遺構が多く見受けられた。





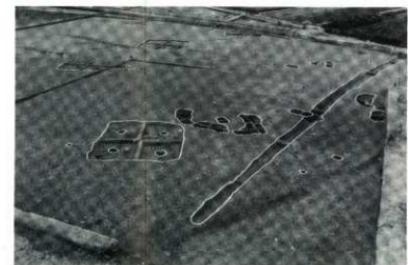
第2図 作田八丁遺跡地区割図



第3図 L-3 古墳検出状況



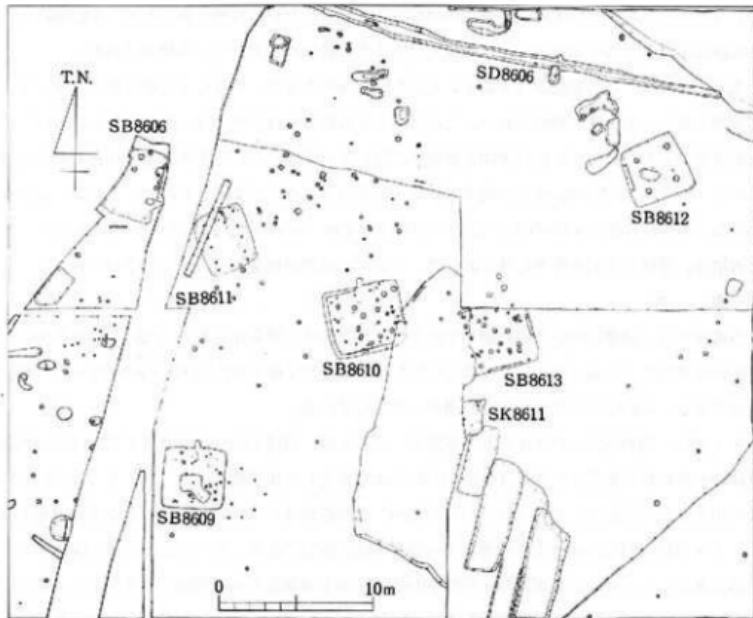
第4図 K-3 柱立石建物 (SB 8607)



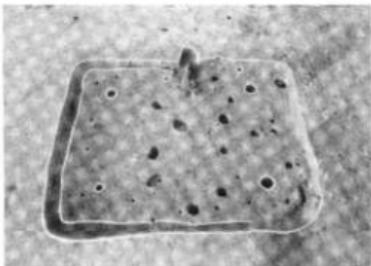
第5図 D-7・8, E-7・8 遺構全景

2. 遺構

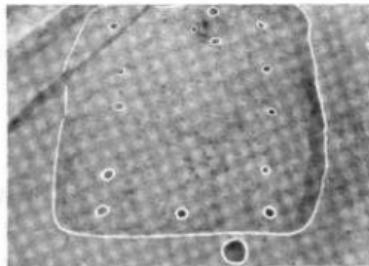
調査の結果、F・G・H・I列では、後世の搅乱及び、削平により、遺構の残存状況が悪く、主な遺構は、F列より北側とI列より南側に検出されただけであった。まずF列より北側(第1図)では、溝によって区画されたと思われる竪穴住居群が検出された。溝(SD8606)は、調査区をおおよそ東西に横切る様に流れしており、溝より南側に全て隅丸方形の竪穴住居6棟が検出さ



第6図 桑田八丁遺跡(D-6・7・8, E-6, 7・8)遺構実測図



第7図 E-7・8 竪穴住居SB8610



第8図 E-7 竪穴住居SB8611

れ、北側では、竪穴住居は検出されず多数のピットが確認された。竪穴住居群（第6図）は、主軸方向でまとまりを見せており、主軸方向が北より西に20°傾く一群（SB8610～13）、北を向く一群（SB8609）、北より東に20°傾く一群（SB8606）の3グループに分かれる。しかし竪穴住居は、住居址間に切り合いがないこと、造りつけの竈をもっているという住居形態、出土遺物もほぼ同時期であることなどから、これら住居群には、同一期間内での連続性と共存性が窺える。また竪穴住居内での主柱穴が確認出来ないものがあったが、特異な例として、SB8611のように直径5～10cm程度の柱穴を2×4間というように住居内にもつものも確認された。

I列より南側では、発掘調査が終了していない部分もあるが、現在までに竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、古墳1基が検出された。これらがあまり距離をはなさずに、検出されたことは、6世紀末を中心とした時代に居住空間と墓域とが接して形成されていた集落形態が存在したことがわかる。竪穴住居（SB8608）は隅丸方形で、おそらく造り付けの竈は北西辺についていると思われる。掘立柱建物（SB8607）は、3×3間（4.4m×5m）で、50～70cmの柱穴を持つ。また古墳は、基底石と石床を少し残すのみで、ほとんど後世の擾乱によって破壊されていた。

3. 遺 物

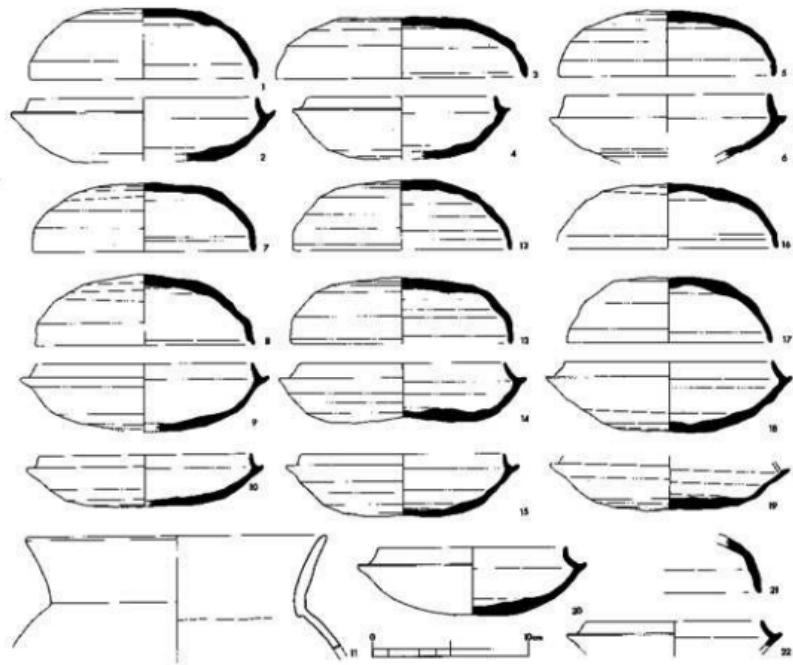
当遺跡では、遺構に伴い多数の遺物が出土した。今回は、竪穴住居及び古墳に伴う遺物についてのみ報告する（第9図）。まず竪穴住居は、全部で計7棟（SB8606、SB8608～13）検出されており、SB8612を除く全てから遺物は出土している。

1・2は、SB8606より出土した須恵器で、坏身2は、口径12.5cm、器高推定3.6cmで立ち上りにやや古い様相を残す。3・4は、SB8608より出土した須恵器である。5・6は、SB8609より出土した須恵器で、坏身6は、口径11.2cm、器高推定4.0cmで立ち上りにやや古い様相を残す。7～11は、SB8610出土の須恵器7～10、土師器壺11である。12～15は、SK8611出土の須恵器である。このなかで須恵器12・13はSB8610の出土須恵器と同一個体の破片があり、SB8610とSK8611は確実に同時期に存在したことが実証された。16～19は、SB8611出土の須恵器である。19は、故意に口縁の立ち上りを打ち欠いており、坏身を何か別のものに転用した可能性がある。20は、SB8613出土の須恵器である。21・22は、古墳出土の須恵器である。これら全ての遺物は6世紀末頃のもので、竪穴住居の主軸方向で3グループに分かれはするものの、これらの遺物からは、時期差は考えられず、遺物からも、この時期、竪穴住居3グループと古墳は共存したと思われる。

4. ま と め

当初、作田八丁遺跡においては、古代白鳳期に建立された安井廃寺、また南海道関係の遺構・遺物が検出されるであろうと思われていたがそれを明確に表すものは確認されなかった。

今回の発掘調査の結果、多数の柱穴群が密集する地区、竪穴住居が造られた居住空間、古墳の造られた墓域とに分けられて集落が形成されたのではないかと推測されるような遺構が確認され



第9図 作田八丁遺跡遺物実測図

た。

これらの遺跡の存在した古墳時代（6世紀末頃）には、観音寺市母神山古墳群、大野原縁塚古墳群というように、県内でも有数の古墳群が形成されていたのにもかかわらず、居住空間と墓域が同時期に近接することは何を意味するのだろう。

作田八丁遺跡の堅穴住居群には、造り付けの竈を有するものがほとんどで、方向性などでグループ分けはできるものの、ほぼ同一時期に存在したであろうと思われる。

香川県内では発掘例の少ない古墳時代（6世紀末頃）の堅穴住居群とそれに伴うであろうと思われる古墳が検出されたことは、今後の集落単位の墓域の形成条件を考えるにあたり、良好な資料になると思われる。

四国横断自動車道建設にともなう
埋蔵文化財発掘調査実績報告

昭和61年度

1987年3月30日

発行 香川県教育委員会

印刷 美巧社